

令和6年度
業 務 年 報

2025. 7

香川県農業試験場

[香農試印刷物 第1642 (25-01)号]

目 次

I 概 要

1. 組織と業務内容 1
2. 職員配置 2
3. 場内主要会議等 3

II 人事・財産・予算など

1. 人事異動 4
2. 施設 5
3. 施設・備品整備実績 6
4. 令和6年度当初予算 6
5. 令和6年度収支決算 6

III 試験研究の実施状況

[新農業技術開発事業]

- 1～3. 強みのある香川県農業を支える技術開発 8
- 4～6. 地球温暖化に対応した新品種開発事業 8
7. DNA マーカーを用いたオリジナル品種開発加速化事業
(第2期) 9
8. 次世代の香川型施設園芸プラットフォーム開発事業 9
9. 県オリジナルキウイフルーツの栽培適地拡大技術の開発
事業 10
10. 気候変動と脱炭素に対応した新品種・新技術の開発事業
..... 11

[公設試験研究機関共同研究事業]

11. さぬきの新規後発酵茶の開発 11
12. コスト低減と増収を目指した施設園芸における植物残
渣の有効利用技術の開発 11

[場内共同研究]

13. 地域農産物農薬安全使用推進事業 12
14. 農薬適正使用総合啓発推進事業 12

[競争的資金等]

15. アスパラガス茎枯病抵抗性スーパー品種で創る新たな
持続的生産体系 12
16. アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「柵板式高畝
栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発 13
17. 「シャインマスカット」未開花症発生要因の解明と発生
軽減技術の開発・実証 13
18. キウイフルーツ花粉除菌技術の実証と実用化 13

19. 施設園芸における高収益栽培体系を実現するための技
術開発 13
20. スマート技術向けの特性を持つ果樹品種の開発 14
21. 輪作体系における持続的な小麦生産の実現に向けた減
化学肥料・減化学農薬栽培技術の確立（みどりの食料シ
ステム戦略実現技術開発・実証事業） 14
22. 園芸作物における有機栽培に対応した病害虫対策技術
の構築（委託プロジェクト） 14

[受託事業等（民間）]

23. 新除草剤等の効果検定試験 14
24. 殺菌剤・殺虫剤の効果検定試験 14
25. 新肥料の肥効試験 15
26. ドローンによるブロッコリーの病害虫防除技術の検討
..... 15
27. ビワキジラミ被害を回避するカットバック整枝による
新樹形の開発 15
28. 赤外線照射によるオリーブ炭疽病の発病抑止効果の検
討 16

[受託事業等（国、国研等）]

29. 温室効果ガス抑制土壌調査事業 16
30. 農薬残留対策総合調査 16
31. ラナンキュラス種苗安定生産技術（培養技術）の検討
(ジャパンフラワー強化プロジェクト推進事業) 16

[企画・営農研究課]

32. 試験研究企画推進、研究情報管理技術の確立 16
33. 農業の機械化に関する研究 16

[病虫・環境研究課]

34. 環境保全型グリーン農業実証定着事業 17
35. 環境にやさしい農業推進事業 17
36. 生産環境安定対策技術の確立 17
37. 病害虫発生予察 18
38. 特殊病害虫防除対策 18
39. 肥料検査業務 18
40. ダム水質調査 18
41. 環境と調和した土づくり対策事業 18

[作物・特作研究課]

42. 普通作物の生産安定化技術の確立 18

43. 次世代さぬきうどん用小麦と温暖化対応水稻品種の開発	19
44. 主要農作物の原原種、原種育成事業	19

【野菜・花き研究課】

45. 環境保全型グリーン農業実証定着事業	20
46. 野菜生産における省力安定化技術の確立	20
47. 花き類の高品質安定生産技術の確立	20

【府中果樹研究所】

48. 果樹の品種開発とその普及定着に向けた安定生産技術の確立	21
49. 果樹等作物病害虫発生予察事業	22
50. 「県産レモン」産地倍増化事業	22

【小豆オリーブ研究所】

51. オリーブの安定生産技術の開発	23
52. オリーブオイル官能評価業務	23
53. オリーブに関する情報発信業務	24

【園芸総合センター】

54. 主要園芸作物の原種養成	24
55. 園芸作物の栽培展示	24
56. 研修指導	25
57. 園芸総合センター整備事業	26

【病害虫防除所】

58. 発生予察関係	26
59. 防除指導関係	27
60. 農薬指導取締関係	27

IV 試験研究の成果と成果の公表

1. 農業に関する普及・研究・行政連絡会議	29
2. 印刷刊行物	29
3. 豊穰	30
4. 香川県農業試験場研究報告	30
5. 学会等発表・講演	31
6. 報告書、雑誌等	32
7. 職務発明	33

V 指導・啓発活動

1. 農業大学校講師派遣	34
2. 研修会等の講師など	35

3. 品評会、審査会等の出席	36
4. 技術研修生等受け入れ	37
5. 技術指導・見学来訪者など	37

VI その他

1. 委員会・協議会等の委員など	41
2. 職員研修	42

I 概要

1. 組織と業務内容

総括	研究所等	部門・課	業 務 内 容
場 長 副場長	本場	(総務課)	庶務、人事、財産、経理
		(企画・営農研究課)	試験研究の企画調整及び産学官連携 農業機械の開発及び作業体系の改善 情報管理及び農業経営改善
		(病虫・環境研究課)	土壌管理、施肥及び栄養診断技術 病害虫の防除技術及び農薬残留等調査 組織培養・遺伝子診断技術の開発
		(作物・特作研究課)	水稻・麦等の品種育成及び栽培技術 水稻・麦等の原種育成及び増殖
		(満濃試験地)	茶の栽培及び加工技術
		(野菜・花き研究課)	野菜、花きの栽培技術及び品種育成
	府中果樹研究所	総務	庶務・経理・庁舎管理
		(果樹研究課)	品種開発 — 果樹の品種選定・育成 栽培技術 — 果樹の栽培技術 土壌・病害虫 — 果樹の土壌管理、施肥及び病害虫防除技術
	小豆オリーブ研究所	栽培	オリーブの品種選定・育成及び栽培技術
		環境	オリーブの土壌管理、施肥及び病害虫防除技術
		品質評価	オリーブオイルの品質評価及び高品質化
		総務・情報発信	オリーブに関する情報発信・庶務・経理
	園芸総合センター	総務	庶務・経理
		原種生産	茎頂培養等による原々種養成及び原種増殖
		技術研修	研修・指導及び実証展示
	病害虫防除所	発生予察	病害虫の発生予察
		防除指導 農薬取締	防除指導及び農薬の取締、鳥獣害対策

職員数

(令和7年3月31日現在)

研 究 職	行 政 職	技 能 職	再任用 育休代替	会計年度 任用職員	合 計
48	14	1	9	56	128

2. 職員配置

令和7年3月31日現在

所 属	職 名	氏 名	備考
総務課	場長	岡崎 力	行政
	副場長	中條 耕二	〃
	〃	藤本 伸	〃
	副場長(兼)課長	中條 耕二	行政
	副主幹	池田 誠	〃
	〃	石村 抄織	〃
	〃	大西 昇	〃
企画・営農研究課	主任	根ヶ山幸祐	〃
	〃	近藤 敬三	〃
	課長	松家 輝	研究
	主席研究員	山下 将吾	〃
病虫・環境研究課	主任研究員	西村 融典	再任用
	〃	中村 裕彦	〃
	課長	川西 健児	研究
	主席研究員	阿部 政人	〃
	〃	中井 清裕	〃
	主任研究員	西村 文宏	〃
	〃	松本 匠哉	〃
	〃	小田 千絵	〃
	〃	川田 千瑛	〃
	主任技師	植田 早紀	〃
作物・特作研究課	技師	片山 貴博	〃
	〃	菰淵 啓三	〃
	課長	森 芳史	研究
	主席研究員	岡田 彰夫	〃
	主任研究員	相澤 美里	〃
	〃	多田 祐真	〃
	〃	吉田 有梨花	〃
	技師	河原 望遥	〃
	主席技師	佃 一路	技能
	主任研究員	佐藤 秀輝	再任用
(満濃試験地)	主任技師	谷川 昭彦	研究
野菜・花き研究課	課長	池内 隆夫	研究
	主席研究員	伊藤 博紀	〃
	〃	森田 知子	〃
	〃	香西 修志	〃
	主任研究員	浜田 佳代子	〃
	主任技師	山崎 愛	〃
	〃	村上 裕一	〃
	〃	藤井 詩乃	〃
	技師	伊藤 彩	〃
	〃	加成 讀治哉	〃

所 属	職 名	氏 名	備考
府中果樹研究所	所長	十河 士志夫	行政
	総務担当 副主幹	関 隆司	〃
	果樹研究課 課長	山下 泰生	研究
	品種開発担当 技師	久保 雅秀	〃
	〃	中山 史菜	〃
	栽培技術担当 主席研究員	福田 哲生	〃
	主任研究員	伊賀 悠人	〃
	技師	秋山 晃輝	〃
	土壌・病害虫担当 主席研究員	生咲 巖	〃
	主任技師	多田 寿和子	〃
小豆オリーブ研究所	総務・情報発信担当 所長	白井 英清	行政
	主席研究員(兼)	柴田 英明	研究
	〃	川原 清剛	〃
	〃	藤村 俊夫	〃
	栽培担当 主席研究員	川原 清剛	〃
	主席研究員(兼)	藤村 俊夫	〃
	技師(兼)	山本 実奈	〃
	品質評価担当 主席研究員	柴田 英明	〃
	主席研究員(兼)	川原 清剛	〃
	〃	柴崎 博之	〃
園芸総合センター	技師(兼)	山本 実奈	〃
	環境担当 主席研究員	藤村 俊夫	〃
	技師	山本 実奈	〃
	所長	大熊 将夫	行政
	総務担当 副主幹	三原 真由美	〃
	原種生産担当 主席研究員	村口 浩	研究
	主任研究員	藤田 究	再任用
	主任技師	加畑 真理	研究
	技術研修担当 主席研究員	村上 一男	研究
	主席研究員	大川 俊彦	研究
病害虫防除所	主任研究員	松本 英治	再任用
	〃	古市 智	〃
	所長	森 充隆	行政
	発生予察担当 主席研究員	三浦 靖	研究
	〃	井之川 育篤	〃
	技師	長尾 洋輝	〃
	防除指導担当 主席研究員	鐘江 保忠	〃
	主任研究員	小野 壮一朗	再任用
	技師	北尾 美咲	〃
	農薬指導取締担当 主席研究員(兼)	井之川 育篤	〃
	〃	三浦 靖	〃
	〃	鐘江 保忠	〃
	主任研究員(兼)	小野 壮一朗	再任用
	技師(兼)	長尾 洋輝	研究
	技師(兼)	北尾 美咲	〃

3. 場内主要会議等

1) 農業試験場公開デー

(1) 第1回 研究成果発表会

開催日：令和6年12月10日（火）

場 所：農業試験場本場

- 成果発表講演会
- 場内見学会
- 研究成果ポスターの掲示（エントランスホール）

(2) 第2回 研究成果発表会 in 小豆オリーブ研究所

開催日：令和7年2月6日（火）

場 所：小豆オリーブ研究所

- 成果発表講演会
- 現地見学会
- 研究成果ポスターの掲示

2) 企画連絡会議

- 第1回：令和6年4月16日（火）（本場）
- 第2回：令和6年5月7日（火）（本場）
- 第3回：令和6年6月4日（火）（本場）
- 第4回：令和6年7月2日（火）（本場）
- 第5回：令和6年8月6日（火）（本場）
- 第6回：令和6年9月3日（火）（本場）
- 第7回：令和6年10月1日（火）（本場）
- 第8回：令和6年11月5日（火）（本場）
- 第9回：令和6年12月3日（火）（本場）
- 第10回：令和7年1月7日（火）（本場）
- 第11回：令和7年2月4日（火）（本場）
- 第12回：令和7年3月4日（火）（本場）

3) 農業試験場発明等審査委員会

第1回：令和6年11月5日（火）（書面）

議 題：品種登録維持 1件

Ⅱ 人事・財産・予算など

1. 人事異動

(令和6年4月～令和7年3月)

年月	転 入		
	職 名	氏 名	前 職
6.4	場長 副場長 企画・営農研究課長 主席研究員 主席研究員 主任研究員 技師 府中果樹研究所長 府中果樹研究所副主幹 府中果樹研究所主席研究員 府中果樹研究所主任研究員 小豆オリーブ研究所技師 園芸総合センター副主幹 園芸総合センター主席研究員 園芸総合センター主任技師 病虫害防除所主席研究員	岡崎 力 藤本 伸 松家 輝 伊藤 博紀 中井 清裕 相澤 美里 伊藤 彩 十河 土志夫 関 隆司 福田 哲生 伊賀 悠人 山本 実奈 三原 真由美 大川 俊彦 加畑 真理 井之川 育篤	農業経営課長 農業経営課長補佐 中讃農業改良普及センター主席普及員 農業経営課長補佐(兼)農業試験場(兼執) 農政課副主幹(兼)政策課副主幹 西讃農業改良普及センター主任 (新採) 農業経営課主幹(農地機構派遣) 中讃土地改良事務所副主幹 農業経営課主席専門指導員(兼)農業試験場(兼執) 人事・行革課(愛媛県派遣) (新採) 農業大学校副主幹 みどり保全課副主幹 人事・行革課(徳島県派遣) 小豆総合事務所主幹(兼)農業改良普及課長事務取扱(兼)小豆農業改良普及センター所長

年月	転 出		
	転出先	氏 名	前 職
6.4	農業大学校長 西讃農業改良普及センター所長 農政課副主幹(兼)政策課副主幹 農業生産流通課長補佐 農業生産流通課主任 小豆総合事務所主任 県産品振興課副主幹 小豆総合事務所副主幹 農業生産流通課主任技師 中讃土木事務所副主幹 小豆総合事務所主幹(兼)農業改良普及課長事務取扱(兼)小豆農業改良普及センター所長 西讃農業改良普及センター技師	大山 興央 佐治 博子 中西 充 三木 哲弘 中村 智哉 穴吹 勇人 島田 敦之 村尾 昭二 川北 兼奨 河口 一則 玉井 敬三 小谷 行野	場長 副場長 主席研究員 主席研究員 主任研究員 主任 府中果樹研究所主席研究員 府中果樹研究所主席研究員 府中果樹研究所主任技師 園芸総合センター副主幹 病虫害防除所長 病虫害防除所技師

年月	内 部 異 動		
	職 名	氏 名	前 職
6.4	病虫・環境研究課長 総務課副主幹 府中果樹研究所技師 病虫害防除所長	川西 健児 池田 誠 多田 寿和子 森 充隆	企画・営農研究課長 府中果樹研究所副主幹 小豆オリーブ研究所技師 病虫・環境研究課長

年月	退 職		
	職 名	氏 名	
7.3	作物・特作研究課主席技師 満濃試験地主任研究員	佃 一路 佐藤 秀輝	

2. 施設

(令和7年3月31日現在) (単位: m²)

区分		本場	満濃 試験地	府中果樹 研究所	小豆オリー ブ研究所	園芸総合 センター	計
土地	建物敷地	36,178.78	4998.45	10,237.00	2,266.01	40,177.88	85,290.40
	圃場	124,249.13	23,454.48	106,480.28	9,787.00	18,851.48	288,675.09
	その他	7,118.07	9,663.00	4,473.30	501.00	4,256.92	26,435.29
	総用地計	167,545.98	38,115.93	121,190.58	12,554.01	63,286.28	400,400.78
うち建物 延べ床面積		19,442.38	947.53	2,146.82	486.81	5,922.41	31,666.48

3. 施設・備品整備実績 (令和6年度農業試験場施設整備費(県単)による備品の整備等)

内 容	部門等	内 容	部門等
旋盤用スクロールチャック	企画・営農 研究課	人工気象器 反射式光度計(RQフレックス)	府中果樹 研究所
イオンクロマトグラフメンテナンス 業務用冷蔵庫	病虫・環境 研究課	多目的ダンプ軽トラック グロースチャンパー	小豆オリーブ 研究所
ラピッド・ビスコ・アナライザー(RVA) メンテナンス	作物・特作 研究課	電話システム一式(交換機及び電話機 他) ラジコン草刈機	園芸総合 センター
乗用型運搬車 乗用型運搬車修繕 野菜作業台車 葉緑素計 電子天秤	野菜・花き 研究課	乾式予察灯 薬用冷蔵ショーケース 送風定温乾燥機	病虫害防除所

4. 令和6年度当初予算

農業試験場費

(単位:千円)

歳 入		歳 出	
区 分	金 額	区 分	金 額
国庫支出金	12, 664	試験研究費	80, 419
使用料及び手数料	1, 035	給与費	664, 294
財産収入	28, 868	運営管理費	86, 443
諸収入	44, 264	整備費	203, 057
県債	156, 000	農業試験場公開デー	160
一般財源	791, 542		
計	1, 034, 373	計	1, 034, 373

5. 令和6年度収支決算

区 分		農業試験場費 (明許繰越含む)	農業改良普 及費	環境農業費	農作物対策 費	植物防疫費	農業大学校 費	病虫害 防除所費
節 別								
1	報酬	115,100						
2	給料	253,641						
3	職員手当	191,436						
4	共済費	102,210						
7	報償費	1,213						534
8	旅費	12,478	109	46	25	464	34	322
10	需用費	104,858	1,767	467	850			2,621
11	役務費	9,082		15	143	93		345
12	委託料	112,586						180
13	使用料及び賃借料	1,459		17				98
15	工事請負費	101,082						
17	備品購入費	27,568						1,410
18	負担金、補助及び交付金	1,660						9
合 計		1,034,373	1,876	545	1,018	557	34	5,519
財 源 内 訳	国庫支出金	12,664						
	使用料及び手数料	1,035						
	財産収入	28,868						
	諸収入	44,264						
	県債	156,000						
	一般歳入	791,542						

節 別	区 分	園芸振興費	特用作物振興費	畜産業費 家畜保健 衛生費	水産業費 水産業 振興費	商工費 産業技術 センター費	土木費 河川海岸 総務費	合計
1 報酬								115,100
2 給料								253,641
3 職員手当								191,436
4 共済費								102,210
7 報償費								1,747
8 旅費		156	7	51			13	13,705
10 需用費		3,338	1,052		100	104	1,192	116,349
11 役務費		42	372			96	38	10,226
12 委託料		2,526	480				396	116,168
13 使用料及び賃借料		12					6	1,592
15 工事請負費								101,082
17 備品購入費								28,978
18 負担金、補助及び交付金			71					1,740
合 計		6,074	1,982	51	100	200	1,645	1,053,974

Ⅲ 試験研究の実施状況

[新農業技術開発事業]

[強みのある香川県農業を支える技術開発]

1. オリーブ新品種「香オリ3号」「香オリ5号」の普及に向けた安定生産技術の確立と加工適性の解明 (小豆オリーブ研究所)

目的: オリジナル品種の栽培上の特性を把握し、基礎技術のデータ収集を行い、管理技術や加工目的に応じた収穫時期と品質評価を明らかにする。

1) オリジナル品種の安定生産技術の開発

「香オリ3号」は「ミッション」と比べて、果実の縦径が大きく推移した。場内ほ場における「香オリ3号」、「香オリ5号」は炭疽病の発病は認められなかった。
平成31年4月に「香オリ3号」、「香オリ5号」、「ミッション」を植栽し、6年目の調査を行った。樹冠容積は「香オリ5号」が最も大きく、収量は「香オリ3号」が最も多かった。
(川原清剛・山本実奈)

2) オリジナル品種の加工適性の解明

「香オリ3号」は「ミッション」と比べ、採油率が高く、早期から安定して高い数値を示した。「香オリ5号」は「ルッカ」と比べ、ポリフェノール含量が多かった。
官能評価では、「香オリ3号」は、11月5日以降にfruity(フルーティー)、bitter(苦味)及びpungent(辛味)が低下した。
(川原清剛・山本実奈)

2. ほ場カルテに基づく土壌伝染性病害の防除システムの確立

(病虫・環境)

目的: タマネギ腐敗病はアザミウマの食害によって発病が助長されるため、アザミウマ防除による同病害に対する防除効果を検討する。また、同病害は複数の病原細菌が存在するため、本県における優占種を調査する。

1) タマネギ腐敗病の防除対策の確立

アザミウマ防除によるタマネギ腐敗病に対する防除効果を検討したが、無防除と比較して発病株率に有意差は認められなかった。発病株より病原細菌を分離し、種の同定を行った。
(片山貴博・西村文宏)

3. 温暖化に強いウンシュウミカンの安定生産技術の確立

(府中果樹研究所)

目的: 「あすみ」は、果実肥大期の裂果による収量低下が問題となっている。そこで果実の安定生産を図るための栽培管理技術を開発する。

1) 「あすみ」の安定生産技術の開発

裂果軽減を目的に植調剤として、エチクロゼート乳剤、NAA水溶剤を用いて試験を行った。無処理と比較して、これら植調剤を用いることで、裂果率を下げることができ、収量が増加するという結果が得られた。
(久保雅秀・山下泰生・秋山晃輝)

[地球温暖化に対応した新品種開発事業]

4. DNAマーカー育種による有用遺伝子の導入 (作物・特作、病虫・環境)

目的: 「おいでまい」の優れた特性に加え、いもち病ほ場抵抗性遺伝子を持つ品種を育成するため、DNAマーカーを用いた選抜技術を確立する。

1) いもち病抵抗性の導入と選抜技術の確立

「おいでまい」といもち病ほ場抵抗性を持つ2品種の戻し交配系統間の交配後代F₃世代を養成し、*Pb1*と*pi21*をそれぞれホモに有する24系統において生産力検定、いもち病ほ場抵抗性検定及び玄米外観品質・飯米の食味評価を行い、2系統を選抜した。

これらの系統のいもち病ほ場抵抗性遺伝子の確認はDNAマーカーを活用した。

(相澤美里・多田祐真・植田早紀)

5. 超促成栽培が可能な高品質多収イチゴ品種の開発 (野菜・花き)

目的: 地球温暖化が進行する中、早期出荷、安定生産が可能となる高品質な種子繁殖型品種を育成する。

1) 種子繁殖型F₁品種の開発

主として「さぬき姫」に由来する自殖固定系統(S4世代)の交配により得られたF₁系統の中から選抜した有望系統について、現地試験を実施したところ、生産者から高い評価が得られた。

また、次のF₁系統候補を作出するため、前年度に選抜した自殖固定系統5系統について、組合せ交配を実施した。
(加成讃治哉・伊藤博紀・香西修志)

6. 地球温暖化に対応した新たな高付加価値果実の開発 (府中果樹研究所)

目的: 夏秋季の高温によるカンキツの浮皮等の品質低下を避けるため、温暖化の影響を受けにくく、特徴のある

高付加価値果実品種を育成・導入する。

1) 温暖化の影響を受けにくく、優良な形質を持つカンキツ新品種の育成

「はれひめ」×「吉田ポンカン」や「はれひめ」×「不知火」等の交雑種5組合せについて、簡易調査を実施した。

新たに「西之香」×「天草」および「あすみ」×「天草」について交配を行った。

(久保雅秀・山下泰生・中山史菜)

【DNAマーカーを用いたオリジナル品種開発加速化事業（第2期）】

7. DNAマーカーを用いたオリジナル品種開発加速化事業（第2期）

(病虫・環境、作物・特作、府中果樹研究所、小豆オリーブ研究所)

目的: 本県のオリジナル品種開発において、これまでの取組みに新たな手法や視点を加え、オリジナル品種育成の加速化と新たな価値を効率的に付加するための技術開発を行う。

1) さぬきうどんに適した次世代「さぬきの夢」の早期選抜技術の開発

麺色の経時変化に関係するポリフェノール酸化酵素の高・低活性型を判定できるDNAマーカー (*Ppo-A1*、*Ppo-B1*) を利用し、遺伝子型を判別した主要な品種について、麺帯を作成し、ポリフェノール酸化酵素の遺伝子型と表現型(麺色の経時変化)の一致を確認した。

(多田祐真・植田早紀)

2) 種なしカンキツの育種を加速化できる技術の開発

雄性不稔性(花粉量)を識別可能な Indel マーカを用いた「種なしカンキツ」の早期選抜技術について、再現性の確認を行った。また、交雑実生13系統に供試し、6系統が雄性不稔を有していることを確認した

(久保雅秀・植田早紀)

3) 茎枯病に対する抵抗性を有するアスパラガス個体選抜技術の開発

茎枯病抵抗性判別共優性マーカーを、現在香川農試で選抜されている育種系統およびその親系統に供試し、遺伝子型を判別した。

(植田早紀)

4) 強みのある次期オリーブ品種の開発に向けた選抜技術の確立

炭疽病抵抗性強度のもの3品種と中程度のもの1品種の葉からCTAB法を用いてDNAを抽出し、ショート

リードの次世代シーケンス解析を行った。

(山本実奈・植田早紀)

【次世代の香川型施設園芸プラットフォーム開発事業】

8. 次世代の香川型施設園芸プラットフォーム開発事業(野菜・花き、企画・営農、病虫・環境、府中果樹研究所)

目的: 野菜・花き・果樹の各品目において、省力化と安定生産が可能な栽培方式である「レイズドベッド」の規格化を検討するとともに、耐候性が高く換気性能の優れる「NNハウス」において、導入品目を拡大しながら新たな生産体系を開発し、「自動走行防除機」等の新たな防除技術を組み合わせることで、多様な品目に適用できる「次世代の施設園芸プラットフォーム」を開発する。

1) 「レイズドベッド」による栽培方式の規格化と高収益生産体系の開発

(1) 栽培ベッドの規格化

ミニトマトについて、4月定植の夏秋どり作型においてベッドの培地種類を検討したところ、ロックウールベッド(幅30cm)が慣行ベッド(幅60cm、土)よりも収量性、作業性で優れた。

(香西修志)

イチゴについては、レイズドベッドの培地の比較試験を行ったところ、配合培土2種類は、慣行と同等の生育であったが、ヤシガラ培地は、生育が劣るもののガク枯れ果の発生が少なかった。

(香西修志・伊藤博紀・伊藤 彩)

ラナンキュラスについては、レイズドベッドの規格と栽植密度について検討したところ、採花本数は、慣行ベッド2条植えと比較して、レイズドベッド幅60cmの2条植えは同等、レイズドベッド幅80cmの3条植えは若干少なくなった。

(森田知子・浜田佳代子)

温州ミカンの栽培ベッドには、農研機構で開発された「S.マルチ」を採用し、地上より20cm高畝にした。

(久保雅秀・山下泰生・秋山晃輝)

(2) 新品種への適応性確認

アスパラガスについては、「さぬきのめざめ2021」の最適管理技術の確立に向けて、株の新植及び株養成を行い、欠株も確認されなかった。

(藤井詩乃)

(3) 無人走行防除機の開発

市販の小型電動噴霧器モーターフォグに代わる安価なブロー式散布器を開発するとともに、本器を搭載した軽量コンパクトな無人走行防除機を試作し、実証した。

(西村融典・中村裕彦)

イチゴにおいて試作されたブロー式散布機を用いて、ナミハダニとアザミウマ類を対象に、アシノナピル水和剤とクロルフェナピル水和剤の散布試験を実施した。その結果、ナミハダニでは手散布と同等の効果があつたが、アザミウマ類では効果が劣った。

アスパラガスにおいて、ブロー式散布機とアスパラガス専用の噴口を用いて、アスパラガス擬葉への薬剤の付着程度について感水紙を用いて評価し、同等の付着程度であることを確認した。

(川田千瑛・松本匠哉・菰渕敬三・中井清裕)

2) 「NNハウス」の特性を活かした栽培体系の開発

(1) 換気性能を活かした夏秋作型の開発

ミニトマトについて、NNハウスでの夏秋どり作型において整枝法を検討したところ、省力化が期待できる「収穫枝更新法」では、株管理作業時間6割で同じ収量が得られ、生産性向上が期待できる「増枝整枝法」では、8～9月の収量が約2倍となり、全体収量も約2割増加した。

(香西修志)

(2) 保温力向上による省エネ生産体系の開発

隙間換気が多いNNハウスでも内張を設置することで、慣行パイプハウスと同等の保温性が確保できた。

(香西修志・森田知子)

イチゴについて、無加温条件での収量向上に向けた適正着果数を検討したところ、慣行よりも着果を多くすることで収量性が向上することが明らかとなった。

(香西修志・伊藤博紀・伊藤 彩・加成讃治哉)

ランキュラスについて、NNハウスと慣行のパイプハウスにおいて生産性について調査した。

(森田知子・浜田佳代子)

3) 減農薬・減化学肥料生産体系の開発

(1) 減農薬防除体系の確立

①レイズドベッドにおける低濃度エタノールを用いた土壌還元消毒効果の検討

イチゴのレイズドベッドにおける低濃度エタノールを用いた土壌還元消毒効果の検討について、真砂土および水田土壌で行った。真砂土、水田土壌のそれぞれ表層から40cm、60cm深まで殺菌効果を認めた。

(片山貴博・西村文宏・中井清裕・伊藤 彩・香西修志)

②防虫ネットを利用した栽培実証

防虫ネット「虫バリア」を用いて、施設栽培アスパラガスにおいて問題となるアザミウマ類の侵入抑制効果を調査した。その結果、ミカンキイロアザミウマは高い侵入抑制効果が認められ、ネギアザミウマはミカンキイロアザミウマよりは劣るものの侵入抑制効果が認められた。

(川田千瑛・松本匠哉・藤井詩乃)

③天敵生物を利用した栽培実証

慣行ハウス、NNハウスにおいて、アザミウマ類の天敵スワルスキーカブリダニと天敵温存植物であるスカエボラを導入し、施設栽培アスパラガスにおいてアザミウマ類の防除効果を検討した。その結果、いずれのハウスにおいてもスワルスキーカブリダニによるアザミウマ類の防除効果が認められ、アザミウマ類に対する化学農薬の使用回数を削減することができた。

(川田千瑛・松本匠哉・藤井詩乃)

(2) 化学肥料低減に向けた低コスト施肥体系の確立

イチゴについては、レイズドベッドによる無加温栽培において、肥培管理を検討したところ、元肥に緩効性肥料(220日タイプ)を施用することで、水のみで供給で同等の収量が得られた。

(香西修志・伊藤博紀・伊藤 彩)

アスパラガスについては、施肥量の検討を行い、これまでの慣行施肥量と半量施肥量で収量、品質を比較したところ、施肥量を半量に減少させても、肥料成分は充分に供給され、秀品率が向上する可能性が示唆された。

また、無施肥でも夏期は無機態窒素の土壌中濃度が高くなった。

(藤井詩乃・村上裕一・中井清裕)

ランキュラスについては、NNハウスと慣行のパイプハウスにおいてかん水、施肥量および収量調査を行った。

(森田知子・浜田佳代子)

温州ミカンについては、点滴かん水同時施肥によって減肥効果を確認できた。

(久保雅秀・山下泰生・秋山晃輝)

[県オリジナルキウイフルーツの栽培適地拡大技術の開発事業]

9. 県オリジナルキウイフルーツの栽培適地拡大技術の開発 (府中果樹研究所)

目的：湿害に強い台木候補による県オリジナルキウイフルーツの栽培技術と低コストなキウイフルーツ用果樹棚を開発することで、省力・低コストを図り、遊休水田などの平坦地を利用した更なる栽培面積の拡大とブランド化の推進を図る。

1) 新台木の適応性検証

湛水処理後、マクロス台のみ新梢が伸長し、既存台木では新梢の伸長はなかった。

(多田寿和子)

2) 新台木を用いた平坦地での栽培性の検討

県オリジナル品種において、マクロス台では既存台木と比べて、樹冠拡大は早いものの、糖度が低くなる傾向がみられた。また、収穫時期を遅延させてもマクロス台の果実糖度が既存台木の糖度に追いつくことは

なかった。

マクロス台果実の貯蔵性については、貯蔵中は糖度および酸が低く推移するものの、果実硬度の低下に大きな差はないと考えられた。

(伊賀悠人・福田哲生・中山史菜)

3) 新台木の増殖技術の検討

マクロス台は挿し木効率が既存台木よりも高いことが判明した。

(伊賀悠人・福田哲生・中山史菜)

4) 自力施工可能な低コスト耐候性果樹棚の開発

農研機構に委託し、自力施工可能な低コスト耐候性果樹棚の設計が完了した。

(伊賀悠人・福田哲生・中山史菜)

[気候変動と脱炭素に対応した新品種・新技術の開発事業]

10. 気候変動と脱炭素に対応した新品種・新技術の開発事業

(野菜・花き、企画・営農、病虫・環境、作物・特作)

目的：周年栽培（露地アスパラガス）や米麦との輪作体系に適する露地野菜（ニンニク）の栽培技術と系統を検討する。

1) 露地アスパラガス有機栽培の検討

有機肥料のみを用いて栽培し、定植2年目の収穫調査を行った。

有機JAS規格に対応した薬剤を用い、発生害虫に対する防除の有効性を検討した。

露地アスパラガスにおいて問題となる害虫種は、春季はネギアザミウマなどのアザミウマ類とアブラムシ類、秋季はアザミウマ類とハスモンヨトウなどのヨトウムシ類であり、シロイチモジヨトウは有機JASで使用可能な薬剤で対応できると考えられたが、ハスモンヨトウはより効果の高い防除方法を検討する必要がある。

(村上裕一・池内隆夫・藤井詩乃・川田千瑛・松本匠哉)

2) 露地アスパラガスの生物的防除を利用した虫害防除技術の確立

より効果的なBT剤の使用方法を検討した。

(川田千瑛・松本匠哉)

3) ニンニクの系統選抜及び栽培体系の確立

選抜した系統を用いた栽培体系および土壌や白絹病、春腐病の発生消長調査および防除試験を行った。

(村上裕一・池内隆夫・中井清裕・片山貴博・西村文宏)

4) ニンニクの機械化実態調査

県内でのニンニク作業機械の利用実態を調査するとともに、調製作業の試作機（根擦り機）の現地実演を行った。

(中村裕彦・西村融典)

5) ニンニク・水稻の輪作試験

ニンニク収穫（茎葉残渣すき込み）1週間後に田植えを行ったが、水稻の生育に支障はなく、田畑転換による二毛作は可能であった。

(森 芳史・河原望遥)

6) ラナンキュラスの新系統育成

「てまりシリーズ」を供試して、塊根冷蔵を行わない場合の開花時期を調査し、交配親として有望な品種について検討した。また、キンポウゲ科の植物との交配から得られた実生の生育を確認した。

(浜田佳代子)

[公設試験研究機関共同研究事業]

11. さめきの新規後発酵茶の開発

(小豆オリーブ研究所)

目的：四国において香川県のみが後発酵茶の文化がなく、醤油や味噌の醸造に使用される麹菌、耐塩性乳酸菌を用いた「さめきの新規後発酵茶」を開発する。

<主査：産業技術センター>

1) 堆肥施用量がオリーブ葉の生育及び品質に与える影響

慣行施用区、5倍施用区、10倍施用区を設け、樹冠容積は5倍施用区が最も拡大した。葉数は、5倍施用区、10倍施用区、慣行施用区の順で増加率が高かった。

(川原清剛・山本実奈)

12. コスト低減と増収を目指した施設園芸における植物残渣の有効利用技術の開発

(野菜・花き研究課)

目的：植物残渣（イチゴ、ミニトマト、アスパラガス等）の堆肥化の過程で発生するCO₂を光合成促進に活用するための基礎データを収集する。また、堆肥化の際に臭気の発生が懸念されるため、臭気対策の検討を行う。

1) 植物残渣からのCO₂発生量の把握

トマト及びイチゴの残渣から2週間で発生するCO₂量を夏と冬で測定した結果、冬は夏の発生量の半分程度となり、残渣の種類によっても発生量に差がみられた。

(伊藤 彩・香西修志・加成讃治哉)

2) 植物残渣の堆肥化における最適条件の解明

アスパラガス残渣の分解が促進される水分状態について、水分条件を変えCO₂量を測定した結果、大きな

差は見られなかった。また、イチゴ残渣の堆肥化の際に発生する臭気について、発酵条件を変え官能検査を行ったところ、基準値を超える条件があったが、活性炭を通すことで基準値以下になった。

＜主査：環境保健研究センター＞

[場内共同研究]

13. 地域農産物農薬安全使用推進事業

(病虫・環境、野菜・花き、病害虫防除所、府中果樹研究所、小豆オリーブ研究所)

目的：登録農薬に限られるため、栽培対応が困難になっている県内の地域特産作物について、農薬登録の適用拡大に必要な農薬残留量調査等を実施する。

1) ビワのスタークル液剤10のドローン散布による薬効・薬害試験

ビワキジラミに対するスタークル液剤10(20倍、14L/10aドローン散布)の防除効果を確認した結果、効果が認められた。薬害は認められなかった。

(鐘江保忠・生咲 巖)

2) オリーブの薬効・薬害試験

ピーコック黒星病に対して4剤の防除効果が認められた。

(小野壮一郎・長尾洋輝)

炭疽病に対する3剤の防除効果は認められ、薬害は認められなかった。ハマキムシ類に対する3剤の防除効果は認められ、薬害は認められなかった。オリーブアナアキゾウムシ幼虫に対するロビンフッドの食入部へのノズル噴射は防除効果があり、薬害は認められなかった。

(藤村俊夫)

無人防除機を用いた炭疽病に対するクプロシールドの8倍、16倍の防除効果は発病がなかったため確認できなかったが、薬害は認められなかった。(藤村俊夫)

3) パセリの薬効・薬害試験・残留試験

アミスター20フロアブル(アゾキシストロビン20%[基準値70ppm])を2,000倍1回散布し、最終散布、14、21、28日後に試料を採取し分析した結果、残留量は、基準値以下となることを確認した。

(中井清裕・菰淵啓三)

4) ラナンキュラスのペンコゼブ水和剤薬効・薬害試験

株枯病に対するペンコゼブ水和剤(400倍塊根浸漬)の防除効果試験では、株枯病が発生せず防除効果を確認できなかった。

(三浦 靖)

5) パセリのセフィーナDC薬効・薬害試験

アブラムシ類に対するセフィーナDCの防除効果試

験では、アブラムシ類が発生せず防除効果を確認できなかった。

(三浦 靖)

14. 農薬適正使用総合啓発推進事業

(病虫・環境、病害虫防除所)

目的：県産農産物の安全・安心を確保するため、モデル地区とモニター農家を設定して、病虫・環境研究課が生産物の農薬残留状況を、病害虫防除所と農業改良普及センターが農薬散布実績と病害虫の発生状況等を調査し、総合的で適切な防除指導を行う。

1) パセリ

東讃農業改良普及センター管内の生産者2戸において、パセリについて散布農薬の分析調査を実施したところ、全て基準値以下であった。

(中井清裕)

農薬使用の実態調査を行った結果、農薬の使用は安全かつ適正であった。また、病害虫の発生状況を調査した。

(井之川育篤・鐘江保忠)

2) 非結球レタス

西讃農業改良普及センター管内の生産者3戸において、非結球レタスの年明け厳寒期どりで散布農薬の分析調査を実施したところ、全て基準値以下であった。

(中井清裕)

農薬使用の実態調査を行った結果、農薬の使用は安全かつ適正であった。また、病害虫の発生状況を調査し、防除暦の見直しを行った。

(北尾美咲・三浦 靖)

[競争的資金等]

15. アスパラガス茎枯病抵抗性スーパー品種で創る新たな持続的生産体系

(野菜・花き、病虫・環境、企画・営農)

目的：農研機構、九州大学、東北大学と共同で開発した露地用アスパラガス品種「あすたまJ」の全国各地での栽培方法及び普及方法を検討する。

＜委託元：農林水産省＞

1) 一斉収穫方法の検討

露地アスパラガスの刈り取り機を試作し、一斉収穫の作業性について検討した。

(西村融典・中村裕彦)

「あすたまJ」多年生株の一斉収穫を行い、その収量性を評価した。

(村上裕一・藤井詩乃・池内隆夫)

2) 環境負荷低減技術の開発

(1) 瀬戸内地方での栽培技術の開発

殺菌剤について化学合成農薬の使用回数を50%削減した減農薬防除暦を作成した。同防除暦に沿った防除を

行い、茎枯病に対する防除効果を検討した。

(片山貴博・西村文宏)

16. アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「枠板式高畝栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発

(野菜・花き、病虫・環境)

目的：農研機構西日本農業研究センターと共同提案した片屋根新型ハウスにおけるアスパラガスの品種特性を評価するとともに、枠板式高畝栽培での栽培管理をより合理的に運用する方法を検討し、多収化技術を開発する。

＜委託元：農林水産省＞

1) 枠板式高畝栽培システムの産地導入に向けた栽培管理技術の開発

片屋根新型ハウス（2連棟タイプ）の5年生7品系について収量性や品質を調査し、各品系の特性を把握した。2品系で反収3t以上を達成し、1系統がおおむね収量3.0t/10a以上であった。

(池内隆夫・藤井詩乃・村上裕一・

川西健児・中井清裕)

17. 「シャインマスカット」未開花症発生要因の解明と発生軽減技術の開発・実証

(府中果樹研究所)

目的：「シャインマスカット」の未開花症について、現地での聞き取り調査をはじめ、現地から採取した植物体サンプルの調査や土壌・環境データの解析により、未開花症発生と栽培条件との関係を解析し、要因の更なる抽出を行う。

＜委託元：農林水産省＞

1) 生産現場での未開花症発生状況および栽培条件の調査に基づく発生要因の解明

R6年度発生園地において、土壌断面調査および土壌分析を実施した。発生園地2園、未発生園地1園において、気温、地温および土壌水分をモニタリングし、未開花症発生園地では土壌水分が高い傾向が見られた。

(多田寿和子・福田哲生・生咲 巖)

2) 「シャインマスカット」未開花症発生軽減技術の開発

防除等を変えて栽培し、未開花症発生が抑制される栽培環境条件を検討している。

(福田哲生・生咲 巖・多田寿和子)

18. キウイフルーツ花粉除菌技術の実証と実用化

(府中果樹研究所)

目的：国産花粉の安全性を確保するため、花粉除菌技術および汚染花粉診断技術を開発するとともに、除菌資材の製剤化を行い、開花時期予測モデルと合わせて実証することにより、除菌による安全な花粉の確保によるキウイフルーツの安定生産に貢献する。

＜委託元：農林水産省＞

1) 花粉除菌資材の実証

除菌資材を製剤化した過炭酸ナトリウムに設定し、除菌効果を高める補助剤としてEDTA、メタリン酸ナトリウムの2種類をそれぞれ授粉溶液に添加し、「さぬきゴールド」の果実品質等への影響を確認した。授粉の際に使用した溶液中の花粉発芽率は、各園地（府中果樹研究所、現地2圃場）ともメタリン酸ナトリウム加用区でやや低下したが、結実率はその他の試験区間で差がなかった。果実重は、各園地とも試験区間で有意差はみられなかった。室内試験における雄4品種花粉の除菌処理後の溶液中花粉発芽率は、マツア（府中）の発芽率がほかの品種に比べて低い傾向であった。Psa3、Psa1ともに、除菌資材による除菌効果が認められた。

(生咲 巖・福田哲生・伊賀悠人・中山史菜)

19. 施設園芸における高収益栽培体系を実現するための技術開発

(野菜・花き、病虫・環境)

目的：新型らくちんシステムとICTを活用した環境モニタリングと「見える化」により、生産者及びハウス毎の環境データが容易に把握可能であるが、改善余地がある。そこで、湿度センサーにより飽差データの把握と谷換気による炭酸ガスコントロールを可能とする改善を実施し、最適な制御技術を明らかにする。

また、自動走行防除機はキュウリなどで実用化されているものの、イチゴ栽培での実用化は進んでいない。そこで、畝やレールに頼らない直進走行性を備えたイチゴ高設栽培に対応できる機械を開発する。

＜委託元：農林水産省＞

1) 湿度センシング機能による飽差管理技術の確立

昨年の試験結果を総括し、「自動谷換気連動システムを活用した飽差管理およびCO₂施用技術マニュアル（案）」（以下「技術マニュアル」という。）を作成した。その後、現地試験ほ場において、技術マニュアルに基づいて環境制御を行って効果を検証した。

その結果、自動谷換気システムによる段階的な換気で急激な飽差の変化を回避することができた。段階的な換気、開度の小さい換気が可能となり、換気扇管理に比べて、急激な飽差変化が起こりにくくなるため、植物体へのストレスが軽減できた。

(伊藤博紀・香西修志・伊藤 彩)

2) 自動谷換気を活用した炭酸ガス施用技術の確立 (農業大学校と共同で実施)

現地試験を行った結果、自動谷換気システムにより段階的な換気、開度の小さい換気が可能となり、換気扇管理に比べて早朝から高濃度設定(現場では、1,500ppmを超える圃場が多数)の必要なく、日中、おおむね外気以上の濃度を確保できることから効果的な施用を実現できた。
(伊藤博紀・香西修志・伊藤 彩)

3) 防除効果、作業性の高い自動走行ロボット防除機の開発

香川高等専門学校と有光工業株式会社が共同開発・改良した自動走行ロボット防除機について、現地の施設イチゴ栽培における主要害虫に対する防除効果の確認を行った。その結果、ハダニ類ではロボットによる散布は、慣行散布と比較し、同等の防除効果が認められた。
(松本匠哉・川田千瑛)

20. スマート技術向けの特性を持つ果樹品種の開発 (府中果樹研究所)

目的:気候変動で深刻化するブドウの着色不良問題を解決するため、高温下でも良好な着色性を示し、収穫適期の判断が容易な品種を開発し、スマート農業の推進に貢献する。
<委託元:農林水産省>

1) 高温でも着色がよく収穫適期を判定しやすいブドウ品種候補の開発

品種候補系統について、香川県での適応性を検討した結果、適熟期にカラーチャート値 11 以上を示し、巨峰に比べて良好な着色性を示すことを明らかにした。
(福田哲生・伊賀悠人・中山史菜)

21. 輪作体系における持続的な小麦生産の実現に向けた減化学肥料・減化学農業栽培技術の確立(みどりの食料システム戦略実現技術開発・実証事業) (作物・特作、病虫・環境)

目的:有機資源の活用の現地実証を行うことにより、化学肥料等の使用量の削減効果を検証し、小麦の減化学肥料栽培技術を開発する。
<委託元:農林水産省>

1) 有機資源を活用した小麦栽培技術の開発

小麦の減化学肥料栽培として、鶏ふんペレットを用いた試験を行った。基肥の鶏ふんペレットに化成肥料を混和した施用が適当であると考えられ、本研究の成果をまとめたパンフレットを作成した。
(森 芳史・多田祐真・河原望遥・中井清裕)

22. 園芸作物における有機栽培に対応した病害虫対策技術の構築(委託プロジェクト)

目的:腐植酸を有する有機資材を複数用いてブロッコリー根こぶ病菌に対する発病抑制効果を明らかにし、有効な資材を特定する。
<委託元:農林水産省>

1) 3種類の腐植酸資材についてポット苗による評価を行った。場内の根こぶ病菌圃場において3種類の資材を混和処理後にブロッコリーを定植して評価を行った。秋冬作、春作ともに根こぶ病の発生が抑制される傾向を示すものもあった。
(西村文宏・川西健児・片山貴博)

[受託事業等(民間)]

23. 新除草剤等の効果検定試験

(作物・特作、野菜・花き、府中果樹研究所)

目的:新除草剤、生育調節剤の効果確認および薬害等の確認を行い、農薬登録に必要な試験を実施する。

<委託元:日本植物調節剤研究協会>

1) 水稻

水稻対象の除草剤として、一発処理剤5剤、体系処理(中後期)剤1剤を供試し、全ての剤について実用性ありと判断した。
(吉田有梨花)

2) 果樹

ブドウおよびモモ対象の1剤について一年生イネ科雑草における適用性を検討し、実用性ありと判断した。
(福田哲生・中山史菜)

3) 緑地管理

除草剤1剤について適用性を検討し、実用性ありと判断した。
(秋山晃輝・中山史菜)

4) 茶

除草剤1剤について適用性を検討したが、雑草の発生量が少なかったため、除草効果は判定不能と判断した。
(谷川昭彦)

24. 殺菌剤・殺虫剤の効果検定試験

(作物・特作、病虫・環境、野菜・花き、府中果樹研究所、病害虫防除所、小豆オリーブ研究所)

目的:新規開発農薬の防除効果と薬害について検討し、実用性を判定する。

<委託元:香川県植物防疫協会、日本植物防疫協会>

1) 野菜(殺菌剤)

(1) 29剤の殺菌剤についてイチゴ、ブロッコリー、レタス、キャベツ、ハクサイ、ニンジン、パセリにおける防除効果と薬害を検討した結果、全ての薬剤で防除効果

が認められ、普及性があると判断した。
(西村文宏・片山貴博)

(2) 4剤の殺菌剤についてブロッコリーにおける防除効果と薬害を検討した結果、全ての薬剤で防除効果があり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。
(三浦靖・長尾洋輝)

2) 野菜 (殺虫剤)

(1) 15剤の殺虫剤について、イチゴ、ブロッコリー、ネギ、トウモロコシ、キャベツにおける防除効果と薬害を検討した結果、いずれの剤も効果があり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。
(松本匠哉・川田千瑛・川西健児)

(2) 3剤の殺虫剤について、ナス、キャベツ、ホウレンソウにおける防除効果と薬害を検討した結果、いずれの剤も効果があり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。
(鐘江保忠・北尾美咲)

3) 果樹 (殺菌剤)

(1) 16剤の殺菌剤についてカンキツ、モモ、カキ、キウイフルーツにおける防除効果と薬害を検討した結果、すべての剤で防除効果があり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。
(生咲 巖)

(2) 1剤の殺菌剤についてカンキツにおける薬害を検討した結果、果実品質や生育に影響はなかった。
(生咲 巖)

4) 果樹 (殺虫剤)

9剤の殺虫剤についてモモ、カキにおける防除効果と薬害を検討した結果、すべての剤で防除効果があり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。
(生咲 巖)

5) 茶樹 (殺菌剤)

1剤の殺菌剤について茶樹における防除効果と薬害について検討したが、試験結果のバラツキが大きかったことから、もち病への防除効果は判定不能と判断した。
(谷川昭彦)

6) オリーブ (殺虫剤)

1剤の殺虫剤について、ハマキムシ類への防除効果と薬害を検討した結果、防除効果もあり薬害も認められなかったことから、普及性があると判断した。(藤村俊夫)

25. 新肥料の肥効試験

(作物・特作)

目的: 新たに開発された肥料について、収量・品質に与

える効果や慣行肥料との差異を明らかにし、新肥料普及のための資料とする。

<委託元: 香川県施肥合理化協会>

1) 水稻、麦

水稻の育苗培土を「コシヒカリ」を対象に2銘柄、「ヒノヒカリ」を対象に2銘柄を検討した。水稻の肥効調節型肥料について、硫黄被覆肥料を「あきさかり」を対象に2銘柄、「ヒノヒカリ」を対象に2銘柄を検証した。混合堆肥複合肥料を「あきさかり」を対象に1銘柄、「ヒノヒカリ」を対象に1銘柄を検証した。

麦類の肥効調節型肥料について、小麦「さぬきの夢2023」に対する全量基肥肥料4銘柄、追肥用肥効調節型肥料4銘柄の適用性を検証した。

(吉田有梨花・河原望遥・森芳 史)

26. ドローンによるブロッコリーの病害虫防除技術の検討

(病虫・環境)

目的: ブロッコリーを対象としたドローン防除技術の確立を目的に、病害虫防除効果および薬害の調査と農薬付着量の評価を基本に、農薬動態把握に基づくドローン防除技術の開発を目指す。

<助成元: (一財) 野田共済会>

1) ドローン散布と慣行散布による病害虫防除効果の比較

ブロッコリー露地栽培において、チョウ目害虫と黒すす病を対象にドローン散布と慣行散布による害虫防除効果を比較した結果、同等以上の効果があった。

(松本匠哉・川田千瑛・西村文宏・片山貴博)

27. ビワキジラミ被害を回避するカットバック整枝による新樹形の開発

(府中果樹研究所)

目的: 主枝を短縮するとともに垂主枝を間引くカットバック整枝により既存樹の樹形改造を施し、枝梢の過密を解消することにより、薬剤の付着程度を改善して、防除効果を高めるとともに、防除作業が容易で、農薬散布量や回数の低減が可能な、ビワキジラミ被害の出にくい本県に適したビワの新樹形を開発する。

<助成元: (一財) 野田共済会>

1) 作業効率の検討

「長崎早生」、「田中」とともに摘房・摘果および袋かけに要した時間は慣行区の方が長くなった。

(秋山晃輝・山下泰生・久保雅秀)

2) 防除効果及び防除効率の検討

薬液付着度は「長崎早生」、「田中」とともに樹形改造区の方が高くなった。薬液散布量は「長崎早生」は樹形改造区の方が多く、「田中」は慣行区の方が多かった。薬液散布時間は「長崎早生」は樹形改造区の方が長くなり、「田中」では区間で差はなかった。

(生咲巖・秋山晃輝)

3) 経営評価の検討

両品種ともに年間作業時間を削減でき、収穫果数が増えたことから収益向上効果が期待できる。

(生咲巖・秋山晃輝・山下泰生・久保雅秀)

28. 赤外光照射によるオリーブ炭疽病の発病抑止効果の検討

(小豆オリーブ研究所)

炭疽病の発生が少なく処理の効果が判然としなかった。また、植物体内(葉と果実)の総ポリフェノール含量の変化に一定の傾向は認められなかった。

(藤村俊夫・山本実奈)

<助成元：(一財)野田共済会>

[受託事業等(国、国研等)]

29. 温室効果ガス抑制土壌調査事業

(病虫・環境)

目的：地球温暖化防止のため、営農活動による温室効果ガスの発生を抑制するとともに、土壌中に炭素をより多く蓄積することが求められていることから、炭素を中心とした土壌調査を実施する。

<委託元：農林水産省中国四国農政局>

1) 農地土壌炭素貯留等基礎調査

県内農地の定点5地点(水田、畑及び樹園地)及び農業試験場内の基準点10地点の合計15地点の土壌について、地表から深さ30cm程度までの層別の炭素貯留量等の調査を行った。場内基準点の有効土層の炭素量は、牛糞たい肥連用区が化学肥料単用区に比べて多くなったが、わら連用区では化学肥料単用区の方が多くなった。

(阿部政人・松本匠哉)

2) 地力調査

前述の15地点において、地表から深さ80cm程度までの断面調査と土層別の試料採取を行い、理化学性について分析した。

(阿部政人・松本匠哉)

30. 農薬残留対策総合調査

(病虫・環境)

目的：水稻栽培で使用した農薬が後作物にどの程度残留するか調査及びその残留リスクを評価する。

<委託元：株式会社エスコ>

1) 後作物残留に係る実態調査

水稻栽培で使用したビルダーフェルテラチェスGT粒剤、ゴウケツモンスター粒剤及びスタークル粒剤に含まれる有効成分であるクロラントラニリプロール、チフルザミド、シメコナゾール及びジノテフランを対象に、後作物のブロッコリー及び土壌中にどの程度残留するか調査した。

(中井清裕・菰淵啓三)

31. ラナンキュラス種苗安定生産技術(培養技術)の検討(ジャパンフラワー強化プロジェクト推進事業)

目的：近年の地球温暖化による秋期の高温がラナンキュラス培養苗順化時の生育に悪影響を及ぼしていることから、培養苗の適正な順化前管理温度の調査を行い、原々種管理の最適管理条件を明らかにする。また、ラナンキュラスの安定生産に向けて、塊根の適切な冷蔵温度について調査する。

1) 継代培養中の温度の違いが生育に及ぼす影響

「恋てまり」は試験管から鉢上げる10日前から段階的に温度を上げることによって生育が旺盛になるとともに抽苔も早くなったが、「あんずてまり」、「春てまり」は培養中の変温管理による効果は低いと考えられた。

(村口 浩・加畑真理)

2) 冷蔵温度の違いが塊根の生育に及ぼす影響

「てまりシリーズ」11品種を供試し冷蔵温度の違いが塊根の生育に及ぼす影響を調査したところ、5～7℃程度の温度で5週間程度冷蔵処理することが望ましいと考えられた。

(浜田佳代子・森田知子)

[企画・営農研究課]

32. 試験研究企画推進、研究情報管理技術の確立

目的：地域農業の展開に必要な技術情報の収集、分析、活用のための研究情報システムを充実し、効率的利用運営を行う。

1) 研究情報資料等の収集および管理

各書籍・文献等を受け付け、管理した。(山下将吾)

2) 農業技術情報サービス

ホームページ等の情報ネットワークの運営・管理を行った。(山下将吾)

33. 農業の機械化に関する研究

目的: 本県特産農産物について、機械化の要望等に応じて調査および機械開発・改良を行うとともに、県内の栽培条件に適した利用技術、作業体系を確立する。

1) 県特産農産物の生産性向上に関する研究

ニンニク及びタマネギの省力・軽労化に関する調査・研究・改良を行った。

ニンニクについては、野菜用半自動多条移植機（商品名：ちどりさん）を用いた先マルチ栽培において畝間抑制を目的に土入れ試験を行った。

タマネギについては、青切り出荷体系向けに開発した新機械収穫・調製体系の乾燥出荷体系への利用拡大を目的に、乾燥貯蔵中の腐敗球の発生状況を調査した。

（西村融典・中村裕彦）

〔病虫・環境研究課〕

34. 環境保全型グリーン農業実証定着事業

目的: ブロッコリー、キャベツ、ナバナは、本県農業の主要品目の一つである。アブラナ科野菜に特有の土壌病害である根こぶ病の発病が見られ、解決すべき課題の一つである。現状は、土壌診断結果に基づく根こぶ病管理の香川県版マニュアルは作成されているものの、防除暦に基づくカレンダー防除が行われている。そこで、圃場一筆ごとに土壌診断の結果から発病リスクを診断した上での対策を講じることにより、土壌処理剤等の農薬使用量低減を目指す。併せて、薬剤の育苗期セルトレイ処理による本圃での農薬散布削減と省力薬剤処理体系について実証する。

1) 人工知能による圃場の発病ポテンシャル診断・対策支援システムによる土壌病害管理

ブロッコリーを栽培予定の27圃場を対象に、土壌診断を行った上で、発病リスクを判断し、対策を行う実証を行った。リスク判断の際には、農試作成マニュアルとAIアプリを用いた。

（中井清裕・西村文宏・片山貴博）

2) 薬剤の育苗セルトレイ処理による本圃での農薬散布作業の削減

キャベツ及びブロッコリーの菌核病を対象に、パレード20フロアブルの育苗セルトレイ処理による防除効果を確認したところ、慣行防除体系と同等以上であった。

（中井清裕・西村文宏・片山貴博）

35. 環境にやさしい農業推進事業

1) 青緑色粘着トラップによるミナミキイロアザミウマの誘引効果および圃場における密度低減効果の検討

（1）試験場圃場における青緑色粘着トラップによる密

度低減効果の検討

場内キュウリハウスにおいて、青緑色粘着トラップの設置枚数による防除効果を比較した結果、判然としなかった。

（2）現地圃場における青緑色粘着トラップによる密度低減効果の検討

現地キュウリハウスにおいて、半促成栽培では、密度抑制効果は判然としなかった。抑制栽培では、防除効果は判然としなかったものの、ミナミキイロアザミウマの初期発生を捉えることができた。

（松本匠哉・川田千瑛）

2) キクの高濃度炭酸ガス処理によるハダニ類防除

キクへの薬害確認とハダニの防除効果確認を目的に、春の主力品種を用いて、高濃度炭酸ガス処理によるハダニ類防除試験を実施した。その結果、処理直後は障害の発生は見られなかったが、定植後に下位葉の褐変など軽微な障害が発生した。新葉に障害が認められなかったことから実用性に問題がないと判断した。

秋の主力品種を用いた現地試験も春試験と同様の結果であった。ハダニは極少発生であったため、防除効果は判然としなかった。

小豆地区で採集したナミハダニ1系統について薬剤感受性検定を実施した結果、供試した11剤のうち、3剤で薬剤感受性の低下が認められた。（川田千瑛）

36. 生産環境安定対策技術の確立

目的: 本県の主要品目について、品質および収量の安定化を図るため、それぞれの品目の固有の病害虫防除および土壌管理、施肥設計に関する課題を解決し、安定生産に資する技術を確立する。

1) 病害虫総合防除技術の確立

土着天敵タバコカスミカメを活用したコナジラミ類の増殖抑制技術の確立について、今までの試験結果を基に防除マニュアルを作成し、「豊穰」に掲載した。

市販予定の薬剤感受性簡易検定キットを用い、試験場ほ場のネギで採取したネギアザミウマと室内維持系統のミカンキイロアザミウマについて従来法との比較を行ったところ、一部の薬剤を除いて同等の結果が得られることを確認した。（松本匠哉・川田千瑛）

2) 低投入持続型肥培管理技術の確立

アスパラガスにおいて、施肥量を減少させても、収量に変化はなかった。（中井清裕）

3) ドローンによる青ネギの病害虫防除技術の検討

青ネギ露地栽培において、ドローン散布と慣行散布

による害虫防除効果を比較した結果、同等程度の効果が得られた。（松本匠哉・川田千瑛）

37. 病害虫発生予察

目的：病害虫防除所が実施する県域での巡回調査に併せて、定点での発生調査を実施し、発生予察事業のための情報提供を行う。

1) 病害虫発生予察事業

県予察ほ場における病害虫の発生状況を調査した。

調査対象作物（品種）は稲（「コシヒカリ」、「おいでまい」、「ヒノヒカリ」）、麦（「イチバンボシ」、「さぬきの夢 2009」）、キャベツ（「おきな」）、タマネギ（「もみじ 3 号」）とした。

また、コナガの性フェロモントラップ、アブラムシの黄色水盤トラップを設置し、1 月～12 月にその半月別捕獲数を調査した。

（西村文宏・松本匠哉・川田千瑛・片山貴博）

38. 特殊病害虫防除対策

目的：農作物に大きな被害をもたらす病害虫について蔓延防止を目的とした有効な防除対策を検討する。

1) ブロッコリー栽培における高品質安定生産に向けた技術開発

黒すす病の伝染源として罹病残渣によるリスクが示された。県内のブロッコリー圃場から SDHI 剤耐性菌を認め、病原菌遺伝子の変異部位を明らかにした。

SDHI 剤耐性菌に対してセイビアーフロアブルの防除効果は高かった。花蕾腐敗病菌について培地による薬剤感受性検定を行った。（西村文宏・片山貴博）

39. 肥料検査業務

目的：肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、普通肥料登録、特殊肥料生産届、肥料販売届等の受理や肥料取扱事業所に対する指導を実施する。

1) 肥料検査、届出件数等の実績

令和 6 年 1 月～12 月の肥料検査、届出件数等は次のとおりであった。

(1) 肥料検査

普通肥料立入検査数	0 件
特殊肥料立入検査数	3 件

(2) 肥料登録届

・普通肥料

登録件数	1 件
有効登録件数	26 件
登録更新件数	1 件
変更・失効等届出件数	0 件

・指定混合肥料

生産届出件数	0 件
変更・廃止等届出件数	0 件
有効届出件数	1 件

(3) 特殊肥料届出

生産（輸入）業者届出件数	10 件（1 件）
変更・廃止等届出件数	8 件
有効届出（輸入）件数	264 件（13 件）

(4) 肥料販売業者届出

販売業務開始届出件数	13 件
変更・廃止等届出件数	29 件
有効届出件数	555 件

(5) 特殊肥料報告

生産実績業者数／業者数	138 件／264 件
輸入実績業者数／業者数	2 件／13 件

（阿部政人・松本匠哉）

40. ダム水質調査

目的：公共用水域の水質を監視するため、県の水質測定計画に基づき、県内 16 ダムについて各 4 地点（上流、表層、底層、下流）、計 64 地点で年 3 回（5 月、8 月～9 月、12 月）水質を測定する。

1) ダム水質調査

ダム表層水の pH、DO、BOD、COD、SS、T-N、T-P、全亜鉛について測定した。

（阿部政人・松本匠哉）

41. 環境と調和した土づくり対策事業

目的：県内の定点ほ場について、継続して土壌調査を実施し、農耕地土壌の実態と変化を把握して適正な土づくりの資料とする。

1) 土壌機能モニタリング調査

県内の農耕地に設けた 9 地点（水田、畑）で土壌化学性（T-C、T-N、可給態リン酸、交換性加里、交換性石灰、交換性苦土）を調査した。水田の 2 地点、畑地の 4 地点で可給態リン酸が基準値を超えており、特に畑の超過量が多かった。

重金属（0.1N 塩酸抽出）の Cd、Cu、Zn は、いずれの地点も基準値を超過していなかった。

（阿部政人・松本匠哉）

[作物・特作研究課]

42. 普通作物の生産安定化技術の確立

目的：本県の稲・麦の収量・品質は気候の温暖化や異常

気象の多発傾向の下で不安定となっている。そこで、気象変動に強い品種や栽培条件を検討し、収量・品質の高位安定化のための技術支援を行う。

1) 主要農作物（水稻、麦）奨励品種決定調査

(1) 基本調査および現地調査

【水稻】

- ・予備調査：9品種・系統
 - ・本調査：4品種・系統
- 水稻では、13品種・系統供試し、標準品種と比較して有望な品種・系統を見出した。現地調査では、1系統調査を行った。

【小麦】

- ・本調査：1系統
- 小麦では、1系統を供試し「さぬきの夢 2023」と比較した。

【裸麦】

- ・供試なし (吉田有梨花)

2) 現場ニーズに対応する技術情報の提供

(1) 水稻・麦類作況情報の提供

主要奨励品種である、早期水稻「コシヒカリ」、普通期水稻3品種「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」、「おいでまい」、小麦「さぬきの夢 2009」、はだか麦「イチバンボシ」について、定期的に生育調査を行い、その結果を随時作況試験情報としてホームページに掲載するとともに、関係機関への情報提供を行った。

(河原望遥・岡田彰夫)

(2) 麦類の作期移動試験

麦類奨励品種に採用された小麦新品種「さぬきの夢 2023」の適正な播種時期を検討するため、播種期の違いが生育及び品質に及ぼす影響を調査するため、11月上旬、中旬、下旬、12月中旬、下旬に播種を行った。

(吉田有梨花)

43. 次世代さぬきうどん用小麦と温暖化対応水稻品種の開発

目的：さぬきうどん用小麦「さぬきの夢 2009」の優れた特徴を維持しつつ、製粉性やグルテンを強化した後継品種を開発する。また、温暖化に対応した高温登熟性に優れる水稻品種を育成する。

1) 「さぬきの夢」後継品種候補となる新系統の育成

グルテンの強化を主な育種目標とし、系統の養成と特性評価・選抜を行った。交配は、令和6年4月に9組合せを実施した。

令和6年秋播において、次のとおり雑種集団を養成した。F₁世代は8集団、F₂世代は5集団、F₃世代は6集団、

F₄世代は9集団について集団養成した。

F₅世代として8組合せについて、当年産で穂選抜したF₄の穂ごとに延べ約730の派生系統に展開した（派生系統1年目）。F₆世代は8組合せ・72系統（派生系統2年目）を養成して系統選抜を行った。

F₇世代は5組合せ・11系統（派生系統3年目）、F₈世代は4組合せ・15系統（派生系統4年目）、F₉世代は2組合せ・2系統（派生系統5年目）、F₁₀・F₁₄世代について6系統を養成して系統選抜を行うとともに、生産力検定試験に供試した。

(多田祐真・相澤美里)

2) 温暖化対応型水稻品種の育成

(1) 高温登熟性品種の育成

登熟期の高温耐性に優れ、本県の気候風土に適する高品質良食味品種の育成を目標とし、F₃世代2系統を養成し、F₅世代は5系統を供試し株選抜した。F₇世代は13系統、F₈世代は7系統を供試し、生産力検定（本試験）、高温登熟性検定、いもち病ほ場抵抗性検定及び系統選抜を実施した。

また、併せて玄米の外観品質及び飯米の食味評価を行い選抜した。

(相澤美里・多田祐真)

44. 主要農作物の原原種、原種育成事業

目的：県内の水稻、麦類、大豆の主要品種について優良種子の生産および普及を促進するため、香川県主要農産物採種事業実施要領に基づき採種ほへの原種の供給を行う。また、採種ほにおいて主要農作物の優良な種子の生産を行うために必要な主要農作物の原種および当該原種の生産を行うために必要な主要農作物の原原種を確保するため、主要農作物の原種および原原種の生産を行う。

1) 水稻・麦類奨励品種の系統管理による保存および原原種の生産

水稻2品種（「コシヒカリ」、「オオセト」）、麦2品種（「さぬきの夢 2023」「イチバンボシ」）を養成して採種、保存した。

(岡田彰夫・河原望遥)

2) 採種計画に応じた原種の生産

水稻5品種（「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」、「おいでまい」、「オオセト」、「クレナイモチ」）、麦類2品種（「さぬきの夢 2023」、「イチバンボシ」）、大豆1品種（「香川黒1号」）を養成して原種を生産し、県種子協会へ分譲を行った。

(岡田彰夫・河原望遥)

3) 香川本鷹の種子生産

満濃試験地において香川本鷹を栽培し、採種を行った。

(谷川昭彦)

[野菜・花き研究課]

45. 環境保全型グリーン農業実証定着事業

目的: アスパラガス栽培では、栽培期間が同一圃場で多年に及ぶことから土壌状態を長期的に考慮した追肥が必要である。現状、栽培暦に基づいた施肥管理が行われているが、一般的に過剰施肥傾向である。加えて追肥は月1回手作業で行われており労力がかかる。そのため、アスパラガスの土壌診断を継続的に実施し、圃場ごとに必要な成分量を設計することで環境負荷の低減と適切な追肥の実現を目指す。併せて、新緩効性肥料を使用する新追肥体系を検証することにより、追肥の省力化を実現する。

1) 土壌診断に基づくアスパラガスの省力的かつ環境にやさしい施肥体系の実証

アスパラガスを栽培している40圃場を対象に、詳細な年2回の土壌診断に基づいた施肥改善を提案し、土壌診断結果が適正値へ近づいた。新緩効性肥料による新追肥体系について、実証圃場を増やし検討し、施肥労力の減少を確認した。

(藤井詩乃・村上裕一・池内隆夫・中井清裕)

46. 野菜生産における省力安定化技術の確立

目的: 担い手農家の規模拡大や経営安定のためには、作柄の不安定要素や時期的な労力集中を軽減するための技術開発が必要である。そのため本県の主要品目について、それぞれの課題を解決し、生産性向上のための技術を確立する。

1) イチゴの生産安定と品種育成

(1) 「さぬき姫」の短日夜冷処理技術による高収益栽培体系の確立

令和7年1月までの販売金額を試算すると、普通促成栽培 < 9/2 夜冷栽培 < 8/15 夜冷栽培 < 8/1 夜冷栽培の順に増額した。

(伊藤博紀・伊藤彩・香西修志・加成讃治哉)

(2) 長期夜冷処理技術による1～2月の中休み軽減効果

収穫の中休み軽減と労力分散を目的に、第1次腋果房の花芽分化後に定植する長期間の短日夜冷処理について検討した。頂果房から第2次液果房までの連続出蕾が確認された。

(伊藤博紀・伊藤彩・香西修志・加成讃治哉)

2) アスパラガスの生産安定と品種育成

これまでの結果から有望であった「さぬきのめざめ2021」の多年生株の収量性を評価し、これまでと同様に優良と判断された。なお、本系統については、現地試験

を開始しており、その収量性を確認した。

(村上裕一・藤井詩乃・池内隆夫)

3) レタス安定生産技術の確立

4月どり作型において、表層施用による50%、75%減肥を検討したところ、生育に差はなかった。

(加成讃治哉・香西修志)

4) ブロッコリーの生産安定技術の確立

9月定植の2品種において、慣行肥料と混合堆肥複合肥料を同タイミング・同窒素量で施肥した結果、混合堆肥複合肥料は、品質が劣る傾向が見られたため、施肥の量とタイミングについて検討が必要であると考えられた。

(伊藤 彩)

5) ニンニク安定生産技術の開発

(1) 輸入種子の検討

輸入種球について、異なる施肥量を用いて、不結球の発生率を確認した。

(村上裕一・池内隆夫)

(2) ニンニクの系統選抜

異なる性質を示す系統から選抜し、有望な系統を評価した。選抜系統の現地適応性についても検討した。

(村上裕一・池内隆夫)

47. 花き類の高品質安定生産技術の確立

目的: 花きの生産振興を図るためには、本県の気象条件等を最大限生かし、土地生産性の高い品目について、品質および生産性の向上を図る必要がある。そのため、優れた経済品種を育成するとともに、収益性、省力化に主眼をおいた栽培技術の確立を図る。

1) 主要花きの高品質化と安定生産技術の確立

(1) カーネーションの生産性向上試験

「ミニティアラ」の優良系統選抜

「ミニティアラ」10品種の生育特性および花色安定度の調査を実施し、優良系統の選抜を行った。

(浜田佳代子・森田知子)

(2) ラナンキュラスの促成栽培技術の確立

ア 品種特性調査

「てまりシリーズ」11品種の栽培特性調査を行った。

(浜田佳代子・森田知子)

イ 冷蔵催芽処理方法の検討

冷蔵温度および冷蔵期間が萌芽や収量および品質におよぼす影響について検討したところ、「恋てまり」と「あんずてまり」では5℃で6週間、「春てまり」では7℃で5週間程度冷蔵することで安定した収量が得られた。また、ポリポットを利用した処理方法の検

討を行ったところ、採花本数については慣行処理とほぼ同等であり、定植作業の軽減が図れる可能性が示唆された。
(浜田佳代子・森田知子)

ウ 無冷蔵栽培の検討

塊根冷蔵処理を行わずに定植した場合の開花時期や収量および品質について検討し、有望品種の選抜を行った。
(浜田佳代子・森田知子)

エ 最適な栽植密度の検討

主要品種「恋てまり」を用いて、栽植密度が収量および品質に及ぼす影響を検討した。
(森田知子・浜田佳代子)

(3) マーガレットの安定生産技術の開発

マーガレットの安定生産に向けて、レイズドベッドにおける適切な水分管理について検討を行ったところ、多かん水區でレイズドベッド栽培が慣行と比較して収量が多くなる傾向が見られた。
(浜田佳代子)

2) 花き新品種の育成

(1) カーネーション新品種の育成

2022年に交配により得られた「ミニティアラ」系の実生について、3次選抜を実施した。
(浜田佳代子)

(2) ラナンキュラスの新品種の育成

2016年から2021年にかけて交配、選抜した紫系統2系統について、収量および特性比較調査を行った。
(浜田佳代子・森田知子)

[府中果樹研究所]

48. 果樹の品種開発とその普及定着に向けた安定生産技術の確立

目的：県が推奨する「さぬき讚フルーツ」の生産を推進するため、オリジナリティ豊かな品種を開発するとともに、消費者に求められる高品質な果実を安定的に生産・供給するための技術や、生産者の高齢化や世代交代に対応した低コスト技術、高付加価値技術を開発する。

1) 新商品開発に向けた新品種の育成

(1) 新品種の育成

ア キウイフルーツ

香川大学と共同研究中の155個体のうち選抜された4個体の調査を行った結果、食味、栽培性等から1個体を淘汰することとし、3個体を継続調査とした。
(中山史菜)

イ カンキツ

場内圃場の「小原紅早生」の珠心胚実生等6系統について果実品質を調査した。また、高松市内で発

見された「小原紅早生」の早熟1系統について果実品質を調査した。

(久保雅秀・山下泰生・秋山晃輝)

(2) 系統適応性検定試験

ア 常緑果樹

・カンキツ第12回系統適応性検定試験では1系統について調査し、継続調査とした。
(久保雅秀)

・ビワ第6回系統適応性検定試験では、場内および現地1か所において3系統について調査し、いずれの系統とも継続調査とした。
(秋山晃輝)

イ 落葉果樹

・モモ第10回系統適応性検定試験では、4系統について調査を行い、1系統は試験中止、1系統は品種登録出願されることとなり、そのほか2系統については継続調査とした。
(中山史菜)

・ブドウ第15回系統適応性検定試験では、1系統について調査を行い、その系統は品種登録出願されることとなった。
(福田哲生)

・カキ第9回系統適応性検定試験では、3系統について調査を行い、いずれの系統とも継続調査とした。
(福田哲生)

(3) 有望品種の選抜

ア 常緑果樹

カンキツ8品種、ビワ5品種について、収量性や果実品質等について比較検討を行った。

(秋山晃輝・久保雅秀)

イ 落葉果樹

モモ10品種、カキ7品種、ブドウ10品種、キウイフルーツ28品種について収量性や果実品質等について比較検討を行った。(福田哲生・伊賀悠人・中山史菜)

2) 品種に対応した安定生産技術の確立

(1) 常緑果樹の高品質安定生産技術の確立

ア ウンシュウミカン

ウンシュウミカン9系統について場内での生育ステージ、果実肥大および時期別果実品質について調査した。大玉、高酸度の傾向を示した。

(秋山晃輝・久保雅秀・山下泰生)

イ 中晩生カンキツ

中晩生カンキツ2系統について場内での生育ステージ、果実肥大および時期別果実品質について調査した。「不知火」「せとか」とともに大玉の傾向を示し、果実品質は平年並みであった。

(秋山晃輝・久保雅秀・山下泰生)

「レモン」の長期貯蔵における最適な貯蔵温度について検討した結果、8℃での貯蔵が、12℃での貯蔵と比べ、腐敗果の発生が低く抑えられたが、果皮障害については差がみられなかった。

(久保雅秀・山下泰生・秋山晃輝)

ウ ビワ

ビワ7品種について、場内での生育ステージや生理障害の発生等について調査した。平年と比べて低酸度大玉果で、裂果の発生が多い傾向を示した。

ビワキジラミに対する防除効果を高めるため、防除前に摘果・摘房を行うことで、慣行の作業体系と比較して、作業時間は増えるものの果実のビワキジラミ被害が軽減できた。(秋山晃輝)

「なつたより」は緑斑症の発生が多く見られることから、小林製袋(株)社製の新果実袋について県内各産地に慣行袋と比較を行った。

その結果、緑斑症の発生抑制効果は見られず、果実品質に差はなかった。(秋山晃輝)

(2) 落葉果樹の高品質安定生産技術の確立

ア ブドウ

「シャインマスカット」の加温栽培において、ジベレリン1回処理は慣行の2回処理に比べていずれの台木でも時期別の糖度上昇が早くなることを明らかにした。(福田哲生)

イ キウイフルーツ

県オリジナル品種において、アメリカ産キウイフルーツ花粉を溶液授粉に用いた場合、授粉濃度250倍では、結実率、糖酸などの果実品質に影響はないが、品種によっては、種子数が減少し、果実重がやや小さくなると考えられた。(伊賀悠人)

ウ モモ

「なつおとめ」の収穫予測式について再検討し、満開後の日照時間の積算値から高い精度で予測を行うことができた。(中山史菜)

(3) 土作り技術と根域管理

キウイの生育不良園(現地圃場)7圃場において、土壌断面調査を実施した。透水性が悪く、気相率が低い場合や、土壌硬度が高い場合に生育不良が生じることが明らかとなった。(多田寿和子)

(4) 新しい病害虫管理技術

カンキツにおけるドローン散布において、ハダニ類防除以外をドローンの登録のみで年間の防除体系を組み、各病害虫に対する効果を検討したところ、一部の薬剤を除いてほとんどの薬剤について防除効果が認められた。また、異なるノズルを有しているドローン機種による薬液付着の違いを検討したところ、AGRAST25よりもT30の方で被覆面積が多い傾向が認められた。

ビワキジラミに対する袋掛け前散布は、ジノテフラン顆粒水溶剤とピリダベン水和剤の混用散布、ジノテフラン顆粒水溶剤とマラソン乳剤の混用散布が高い防除効果が認められた。

モモのモモヒメヨコバイに対するスルホキサフロ

水和剤1,000倍散布は、無処理と比較して防除効果が認められた。

キウイフルーツ果実軟腐病に対して、クレソキシムメチル水和剤は防除効果が認められ、ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤、チオファネートメチル水和剤、イプフルフェノキン水和剤の収穫前散布は、やや低いものの防除効果が認められた。(生咲 巖)

49. 果樹等作物病害虫発生予察事業

目的: 植物防疫法に基づき、病害虫の発生状況を把握して発生と防除に関する情報を提供するなど、発生予察事業を実施する。府中果樹研究所では果樹病害虫の発生状況調査を分担、実施する。

1) 果樹等作物病害虫発生予察事業

病害ではカキの角斑落葉病の発生が多く、虫害では、共通害虫であるカメムシ類、吸蛾類とナシヒメシンクイの発生が多かった。(生咲 巖)

50. 「県産レモン」産地倍増化事業

目的: 近年、若手生産者を中心にレモンの生産意欲が高まっていることから、本県においても県産レモンの生産振興とブランド化を図ることとしている。しかし、低温に弱いレモンの栽培適地の把握や栽培技術の確立ができていないことから、栽培可否や収穫時期の目安を示す「適地マップ」の作成と栽培技術の体系化を行う。

1) 適地マップの作製

関係機関との協議により、適地性を判定する基準温度を設定し、農研機構に委託して県域版の適地マップ(1kmメッシュ)を完成させた。また、次年度の産地版適地マップの作成に向け、西讃地域で20か所に気象観測装置を設置し、冬期の気温データを測定した。

(山下泰生・久保雅秀・秋山昂輝)

2) 栽培マニュアルの作成

(1) 「アレンユーレカ」における生育調査

四季咲き性のあるレモンの発芽や開花の時期・程度、開花時期別の果実肥大の推移を調査した。その結果、5月及び6月に開花した果実が大半を占めるとともに、7月以降に開花した花由来の果実は、肥大を停止する12月に収穫可能な大きさを満たさないことが分かった。(久保雅秀・秋山昂輝・山下泰生)

(2) 「璃の香」における生育調査

時期別の果実品質の推移について調査を行い、収穫時期は一定の搾汁率を確保できる8月15日以降になることが分かった。

また、作業分散、樹のコンパクト化を目的に夏せん定と春せん定の比較を行った。その結果、夏せん定では、収量の減少、徒長枝の発生により作業効率の低下が問題となったため、せん定時期は春期が適当であった。
(久保雅秀・秋山昂輝・山下泰生)

[小豆オリーブ研究所]

51. オリーブの安定生産技術の開発

目的: 近年、県外でオリーブ栽培に取り組む事例が急増しており、今後県産オリーブの優位性を維持し続けるためには、これまで以上に品質や生産性の向上が重要となっている。

そこで、毎年安定して果実生産を行うとともに、高品質なオイルを生産できるよう安定生産技術の開発を図る。

1) 連年安定生産技術の開発

(1) 整枝せん定の改善による安定生産

「マンザニロ」における縮伐処理5年後の調査を行った。その結果、10aあたり収量は、約2.5tが確保でき、縮伐処理を導入しても樹冠形成と収量確保は両立できると思われた。
(川原清剛・山本実奈)

2) オリーブオイル高品質化対策

(1) オリーブオイル品質向上のための土壌水分管理技術

「香オリ5号」の多かん水処理の影響を調査したが、果実落果が多発し、オイルの品質は明らかにできなかった。
(川原清剛・山本実奈)

3) 病害虫防除対策の検討

(1) 害虫の発生状況調査

予察灯におけるカメムシ類の誘殺数は、主要種であるチャバネアオカメムシが5月下旬以降増加し、7月上旬にピークを迎え、4～7月の誘殺数は平年の19倍となった。クサギカメムシの誘殺数は平年より多く推移した。ツヤアオカメムシの誘殺は平年より早い4月中旬から確認され、8月中旬まで平年より多く推移し、4～7月の誘殺数は平年の142倍となった。

予察灯におけるハマキムシ類の誘殺数は、主要種であるマエアカスカシノメイガが春期はやや少なく、秋期は平年並であった。そのほかの誘殺数は、チャノコカクモンハマキが3頭、チャハマキが2頭であった。

県内11か所(東讃:1か所、小豆:6か所、中讃:2か所、西讃:2か所)における炭疽病の発病果率の平均値は9月中旬が0.6%であったが、10月中旬は2.0%と増加した。
(藤村俊夫)

(2) 炭疽病感受性の評価

「香オリ3号」と「香オリ5号」の圃場での炭疽病の発生を調査したところ、10月下旬時点での発病は認められなかった。また「ミッション」の発病果率は5.0%であったことから「ミッション」と比べて強いと推察された。
(藤村俊夫)

(3) 近赤外光照射によるオリーブ炭疽病の発生抑止効果

側枝新梢先端に近赤外光を照射することで主枝新梢先端に照射するよりも効率が良く同等の効果が得られる可能性があることが示唆された。

(藤村俊夫・山本実奈)

4) 品種に関する試験

(1) 有望品種の選抜

平成30年3月にスペインのコルドバ世界オリーブ遺伝資源バンクより炭疽病抵抗性等に優れる穂木を導入し育成中であった「Menya」、「Ulliri i Kuq」、「Koroneiki」を定植した。
(川原清剛・山本実奈)

52. オリーブオイル官能評価業務

目的: 県内で栽培・収穫・採油されたオリーブオイルの官能評価を行うことにより、県産オリーブオイルの品質向上の基礎資料とするとともに、生産者への指導を行う。

1) オリーブオイル官能評価に関すること

(1) 依頼分析の実施

70点の県産等オリーブオイルの官能評価依頼分析を受託、実施した。
(柴田英明)

(2) 官能評価員研修の実施

官能評価員25名に対し4月、6月、7月、10月に評価技術の向上および評価の平準化を目的に研修を実施した。内部精度管理を目的に1月に強度確認試験を実施した。
(柴田英明)

(3) 官能評価員技能評価試験の受験

官能評価員25名が4月、7月、10月、1月にアメリカ油化学会が実施する技能評価試験を受験した。

4月、5月にインターナショナル・オリーブ・カウンシルが実施する技能評価試験を受験し、試験結果により前年度に引き続き7年連続で認定パネルとなった。
(認定期間は令和6年12月1日～7年11月30日まで) 2月には翌年度の受験申請を行った。(柴田英明)

(4) ISO/IEC17025:2017の認定更新

令和元年3月に取得した「インターナショナル・オリーブ・カウンシルの定めるバージンオリーブオイル官能評価法に基づくバージンオリーブオイルの欠陥の評価および、ポジティブな特性評価」を範囲とした試験所品質マネジメントシステムの運営における技術的能力

についての認定に関する更新審査を12月に受け、合格となった。
(柴田英明)

2) オリーブオイル高品質化対策

(1) 高品質化サポート業務

優良オイルの国際品評会への出品について指導・助言を行った。採油技術者に対し高品質化及び問題改善を目的に技術指導を実施した。
(柴田英明)

53. オリーブに関する情報発信業務

目的: オリーブの試験研究機関として、香川県のオリーブに関する様々な情報を発信し、ブランド力の強化を図る。

1) オリーブに関する情報発信

(1) ホームページによる情報発信

オリーブの開花、生育状況、害虫の発生状況に関するページの更新を定期的に行い、情報発信の回数を増やした。
(白井英清)

(2) 展示室を用いた情報発信

当研究所内に設置された展示室において、本県のオリーブの歴史や最新の技術・研究成果などを、映像等を交えて来場者に分かりやすく説明した。

また、展示室パネルを最新情報に更新するとともに、病害虫の標本を充実させ、視察や親子体験教室で見学できるように改善した。
(白井英清)

2) 職員・県民等に対するオリーブに関する研修

オリーブ・オリーブオイルに関する講習会、視察対応のほか、県民への理解を促進するため、長寿大学受講生への研修会を行った。
(白井英清)

[園芸総合センター]

54. 主要園芸作物の原種養成

目的: 主要な園芸作物の安定生産のため、県育成品種や導入した有望品種について、組織培養技術などを利用して、原原種や原種の養成・増殖を行い、優良種苗の安定供給を図る。

1) 花き優良種苗の養成

組織培養技術などを利用し、花き4品目の優良種苗を養成した。

カーネーションは、県育成品種7品種(「ミニティアラピンク」など)について、原種140本を養成した。

また、「ミニティアラサニー」について、現地選抜を行い、外部委託を経て優良種苗を養成した。

マーガレットは、在来系統など3系統について、原種2,400本を養成した。

キクは、夏ギク「黄金浜」について、原種400株を養成した。

ラナンキュラスは、県育成品種6品種(「春てまり」、「ゆずてまり」、「茜てまり」、「れもんてまり」、「紅てまり」、「桃てまり」)について原種2,500球を養成した。
(村口 浩・加畑真理・藤田 究)

2) 野菜優良種苗の養成

組織培養技術などを利用し、野菜2品目の優良種苗(培養苗および原種)を養成した。

サツマイモは、「高系14号」の優良系統をもとに3,000本の培養苗を養成した。

イチゴは、「女峰」200株、「さちのか」50株、「さぬき姫」750株を養成した。
(村口 浩・加畑真理・藤田 究)

3) 果樹優良種苗用母樹の養成

果樹は、3品目の優良種苗用原母樹を養成した。

ブドウ原母樹は、「ピオーネ」15kg、ピオーネ用台木30kgを養成した。

キウイフルーツ原母樹は、「香緑」、「香粋」、「さぬきゴールド」、「さぬきエンジェルスイート」、「香川UPーキの1〜5号」、「さぬきエメラルド」、「さぬき花粉力」、「シマサルナシ」の12品種、計22鉢を養成した。

オリーブ原母樹は「香オリ3号」9.5kg、「香オリ5号」16.5kgの養成を行った。
(村口 浩・加畑真理・藤田 究)

55. 園芸作物の栽培展示

目的: 生産者の技術向上と経営の安定化を図るため、農試育成品種や導入品種の栽培展示、新しい管理技術や資材の実証展示を行う。また、花と緑の快適環境づくりや暮らしに活かした花づくりへの関心を高める事例展示を行う。

1) 組織培養植物の展示

組織培養技術の研修や展示用に、カーネーション、キク、マーガレット、サツマイモ、イチゴを組織培養した。

茎頂培養の培地は、マーガレットに農事試験場培地、カーネーションにHolley&Baker培地、キク、サツマイモにMS培地、イチゴにWhite(修正)培地を使用した。継代培養の培地はMS培地を使用した。

組織培養植物は、25℃、2,000lux、17時間日長の培養条件で保存・展示した。
(村口 浩・加畑真理)

2) 鉢花類の栽培技術と品種の展示

県内で栽培されている鉢花類の主要品目と新規品目(新品種含む)を中心に展示した。

1・2年草は、パンジー、サイネリアなど、宿根・多年草は、ガザニア、クリスマスローズなど、球根類は、球根ベゴニア、シクラメンなど計18品目を栽培展示した。

観葉植物は、アンズリウム、スパティフィラムなど24品目を、熱帯果樹は、マンゴー、アボカドなど8品目を栽培展示した。花木類は、ハイビスカス、ブーゲンビリアなど9品目を、ラン類については、ファレノプシス、カトレアなど11品目を栽培展示した。

(村上一男・古市 智)

3) 切花類の栽培技術と品種の展示

宿根草や1・2年草の切花類について、県育成品種や最近の新しい品種などを中心とした品種展示および栽培技術展示を行った。

カーネーション：県育成品種「ミニティアラピンク」、「せとのはつしも」など32品種を用いて、冬切り栽培（ロックウール養液栽培）を行った。

ガーベラ：「アロハ」など4品種を用い、周年切り栽培（ロックウール養液栽培）を行った。

バラ：「マダムサチ」など18品種を用い、周年切り栽培（ロックウール養液栽培）を行った。

マーガレット：「在来種」など9系統の系統比較展示を行った。

ランアンキュラス：県育成品種「小春てまり」など9品種を用いて冷蔵促成栽培を行った。また、高設ハンモック栽培と使用済み培土を利用した栽培について、土壌蒸気消毒の被覆ビニールの包み方による温度上昇時間の比較試験を行った。

その他、アスター、キンギョソウなど16品目24品種を用いて栽培展示を行った。（村上一男・古市 智）

4) 花木類の品種展示および観賞用展示

花木の品種見本を栽培展示するとともに、鉢物花木の展示をした。

(1) 見本展示

- ①ヤマアジサイ：「剣の舞」他14品種
- ②西洋アジサイ：「ミセス・クミコ」他28品種
- ③オリーブ：「ルッカ」他4品種
- ④クルメツツジ：「朝露」他50品種
- ⑤サクラ：「紅枝垂桜」他11品種
- ⑥サツキ・アザレア類：「一生の春」他15品種
- ⑦タベグイア（イペー）：1品種
- ⑧ツバキ・サザンカ：「金毘羅弁慶」他96品種
- ⑨ハナウメ：「八重寒紅」他99品種
- ⑩ロウバイ：「素芯」、「満月」の2品種
- ⑪バラ：「ローテローゼ」他22品種
- ⑫盆栽：クロマツ、ハナウメ、オリーブ等

(村上一男・松本英治)

(2) 展示場展示

- ①サツキ類：4月17日～5月11日
 - ②ヤマアジサイ：5月11日～6月8日
 - ③ハナショウブ：5月22日～7月3日
 - ④アジサイ：6月8日～6月29日
 - ⑤アサガオ：7月4日～9月15日
 - ⑥ホオズキ：8月25日～10月11日
 - ⑦鑑賞ギク：10月26日～12月5日
 - ⑧盆梅：1月10日～3月15日
 - ⑨松盆栽：3月15日～3月31日
 - ⑩オリーブ、真柏盆栽：3月15日～3月31日
- (村上一男・松本英治)

5) 花壇展示

花壇の栽植提案、また、来訪者に対する景観保持のために展示を行った。

夏～秋花壇は、サルビア、カンナなど5品目で装飾した。秋～春花壇は、ビオラ10品種で花色を変えて飾花した。特にロータリー中央のフラワータワー（5m）には7品種7色のビオラで飾花し、園内のフラワータワー（2.5m）5基、フラワーボール5基、フラワーウォールもビオラで装飾された。ハーブ花壇では、26品目の栽培展示を行った。

また、アガベ、ユッカなどの多肉植物9品目で「ロックガーデン」の事例展示を行った。（村上一男・古市 智）

56. 研修指導

目的：県民の花づくりに対する知識を深めてもらうため、休日を含めて施設を開放するとともに、園芸相談を実施する。

来訪者のために、センター内掲示板やホームページ等で場内の見所情報などを広報する。

また、特別支援学校生の勤労体験を通じた「働く力」等の充実・発展のための支援や、中学生の進路学習の一環としての職場体験学習に協力する。

1) 園芸相談の実施

花木の年間の管理や草花・球根類の夏期の管理、病害虫防除のほか、忌避効果のある植物の事例や管理方法など、約300件の園芸相談を実施した。

(村上一男・松本英治・古市 智)

2) 来訪者への情報提供

(1) 県ホームページでの情報提供

ハナウメ、サクラ等の開花情報42件について県ホームページで情報発信した。

(2) センター内掲示版での情報提供

県ホームページより詳細に、温室内切り花・鉢花の作型や生態、見本園などの見どころや展示情報を86件提

供した。

- (3) 空港周辺施設連絡会公式インスタグラムでの情報提供

園内の展示場、草花、花木等の見頃・見所情報などを49件発信した。

- (4) テレビ、ラジオ等での広報

ロウバイ、ウメ等の広報をテレビ、新聞等を通じて5件実施した。(村上一男・松本英治・古市 智)

3) 研修視察および一般開放

香川中部支援学校の現地実習、高松市立香東中学校の職場体験学習など166人に対応した。

一般開放では、シニア層を中心とした園芸愛好家、グループ、社会福祉施設のほか、園内の植物を写真に収めたりスケッチする来訪者が多く訪れた。

特に、休日や学校の春・夏休み等の長期休暇時期には、子供を含む家族連れも多く訪れた。

(村上一男・松本英治・古市 智)

57. 園芸総合センター整備事業

目的：花き等の研究拠点施設としての機能に加え、「花と緑に触れ合う、憩い・学びのさぬきフラワーガーデン」をコンセプトとし、価値ある施設としてのプロデュース運営や情報発信の強化、空間展示の充実等により、幅広い年齢層の集客に努め、花のある暮らしの提案や賑わいづくりを推進した。

1) 立体花壇、育苗ハウス等の整備

花を立体的に配置デザインし、空間を活かした企画展示を行う立体花壇の設置を行った。高さ5メートルのフラワータワーをメインとして、様々な形状の立体花壇を配置した。夏展示にあたって苗の耐暑性試験を行い、品目的に、初夏にはペチュニア、ベコニア、ケイトウ、盛夏にはコリウス、アイビーが適性であることを確認した。

併せて、立体花壇への苗安定供給のための育苗施設として、NNハウスの整備を行った。

また、新たな施設機能を強化するため、アーチ型ゲートや案内板、2次元コードでの植物案内板の設置、園内周遊道のバリアフリー化などを実施した。

2) 情報発信、各種イベントの実施

情報受発信の強化として、園内にWIFI環境を整備するとともに、タイムリーな情報を発信するためのSNSアカウントを開設した。

また、施設を体験し、園芸や植物への関心を高める行事を開催した。

- (1) ネイチャーゲーム

園内の植栽された植物への理解を促進するため、冬の花スポットを巡り、花を観察する自然体験プログラムを開催した。

日 時：12月15日 参加者：約300人

(2) 園内ガイドツアー

園内の見どころである梅について、開花や仕立て方、園内の整備状況を案内する行事を開催した。

日 時：2月8日、16日 参加者：29人

(3) キッズ体験プログラム

子供を対象に、植物の観察や実験ができる体験プログラムとして、花の観察、培養体験や花瓶制作等を実施した。

日 時：3月9日 参加者：24名

(4) 植物観察スタンプラリー

県オリジナル品種を中心に、植物を観察しながら植物の草姿をしたスタンプを集め、オリジナル図鑑を作るスタンプラリーを開催した。

日 時：3月22日～30日 参加者：2,160人

(5) しだれ桜ライトアップ

三春滝桜の子孫樹となる当園のしだれ桜の認知度向上のため、夜間ライトアップイベントを初開催した。

日 時：3月25日～3月27日 参加者：2,200人

(大川俊彦・加畑真理)

[病虫害防除所]

58. 発生予察関係

目的：植物防疫法に基づき、病虫害の発生状況を把握して発生と防除に関する情報を提供するなど、発生予察事業を実施する。

1) 病虫害発生予察事業

18作物等の205病虫害(普通作物2作物の40病虫害、果樹5作物の60病虫害、野菜・花11作物の99病虫害、作物共通6害虫)について、それぞれの発生状況を把握するのに適した時期に定点および巡回調査や、予察灯等による調査を実施した。

(三浦 靖・井之川育篤・長尾洋輝)

2) 病虫害の診断および生態調査

(1) 耐性菌等調査事業

イチゴ炭疽病菌56菌株を対象に、4剤について耐性菌検定を行った。(長尾洋輝・北尾美咲)

(2) 抵抗性害虫等調査事業

シロイチモジヨトウ8個体群、ハスモンヨトウ6

個体群を対象に、10 剤について抵抗性検定を行った。
(鐘江保忠・三浦 靖・北尾美咲)

(鐘江保忠・森 充隆・井之川育篤・三浦 靖・
小野壮一郎・長尾洋輝・北尾美咲)

(3) 保毒虫検定事業

ヒメトビウンカを対象に RSV ウイルスの保毒虫
検定を行った。ELISA 検定で 5.8%と平年並と判断
した。
(井之川育篤・鐘江保忠)

(4) 病害虫同定・診断

年間 202 件の農業改良普及センター、J A、農業
者等からの病害虫診断依頼に対応した。

3) 病害虫発生予察情報

発生予察予報を 11 回、注意報を 3 回(果樹カメムシ
類、斑点米カメムシ類、ハスモンヨトウ及びシロイチモ
ジヨトウ)、調査速報を 5 回(果樹カメムシ類、ヒメト
ビウンカ R S V 検定、タバコガ類、シロイチモジヨトウ
及びハスモンヨトウ薬剤感受性検定、イチゴ炭疽病薬
剤感受性検定)、麦類赤かび病に関する情報を 5 回発表
し、HP などにより情報を提供した。

(三浦 靖・井之川育篤・長尾洋輝)

4) 高度発生予察技術確立事業

ナバナ白さび病の一次伝染源となる卵胞子の発生生
態を調査したところ、接種試験及び発芽試験ではいず
れの培養温度条件でも卵胞子による発病・発芽はみら
れなかった。また、本病害発生圃場から採種した種子か
らは白さび病菌が検出されたが、種子伝染は認められ
なかった。
(北尾美咲・三浦 靖)

キウイフルーツにおけるクワシロカイガラムシの発
生消長について県内 7 か所で調査し、防除時期の検討
を行った。
(長尾洋輝・小野壮一郎)

5) 病害虫防除員の設置・活動

病害虫防除員延べ 37 名(普通作 10 名、果樹 6 名、
野菜・花 17 名、特殊調査 4 名)を設置し、対象となる
病害虫の発生状況報告を受けたほか、防除指導および
農薬安全適正使用の推進を行った。また、本年度新規に
委嘱された病害虫防除員を対象とした研修会を 5 月 14
日に実施した。
(北尾美咲)

59. 防除指導関係

目的: 植物防疫法に基づき、植物防疫あるいは防除に関
する企画等を実施する。

1) 病害虫防除方針策定

香川県主要農作物病害虫・雑草防除指針を農業経営課
と連携して策定した。

主要農作物防除体系策定の指導にあたった。

2) 特殊病害虫侵入防止対策事業

国が指定した 21 種の侵入警戒有害動植物について侵
入調査を行った結果、トマトキバガの誘殺を確認した。
その他 20 種の侵入警戒調査では、対象となる病害虫は
確認されなかった。(長尾洋輝・小野壮一郎・北尾美咲)

3) 特殊病害虫緊急防除対策事業

(1) カンキツにおけるアザミウマ類対策の検討

果実着色期に加害するアザミウマ類は、ハナアザミウ
マが主要種であることが確認された。また、6 月下旬～
12 月下旬までの青色粘着トラップへの誘引虫数(雌成
虫)は、ハナアザミウマが 8 割以上を占めた。

(小野壮一郎・長尾洋輝)

(2) イネカメムシの防除対策の検討

県内における発生状況調査を行った結果、県内全域へ
の生息範囲の拡大が確認された。また、フロアブル剤の
出穂期防除でも十分に防除効果があることが示された。

(鐘江保忠・井之川育篤)

4) 輸出用マツ盆栽の病害虫対策

E U 及び米国向け輸出マツ盆栽において、輸出先が侵
入を警戒しているマメコガネとマツコナカイガラムシ、
マツ類そうほう病、ゴマダラカミキリ等の発生実態につ
いて、E U 及び米国へ輸出を予定している全生産者の全
盆栽を調査した結果、上記病害虫の発生は確認されな
かった。また、マメコガネ成虫のマツ属への加害状況に基
づく食餌選好性を調査したところ、同成虫によるマツ茎
葉の食害は確認されなかった。このことからマメコガネ
成虫はマツの茎葉を加害する可能性は低いと推察され
た。
(三浦 靖・鐘江保忠)

5) 鳥獣害防止対策事業

カモ 4 種とオオバンによる麦類被害の発生予察手法
を検討した。11 月～翌 3 月にかけて毎月 2 回、多度津
町、高松市の被害ほ場近傍に位置するため池に生息する
カモ等の頭数を計測した。併せて、周辺圃場の被害状況
や被害対策の有無について調査した。
(北尾美咲)

60. 農薬指導取締関係

目的: 農薬取締法に基づき、安全かつ適正な農薬の販売
および使用を指導する。

1) 農薬取締指導

令和 6 年度末の農薬販売者数は 608 者、うち 120 販

売者に立入検査を実施した。違反件数は 11 件で、その内容は帳簿の不備や記載漏れ等であった。

(井之川育篤)

2) 農薬安全使用の指導

農薬販売者や使用者を対象に、農薬危害防止運動月間中の 7 月に、県内 4 か所で危害防止や安全・適正使用を啓発する講習会を実施した。

(小野壮一郎)

IV 試験研究の成果と成果の公表

1. 農業に関する普及・研究・行政連絡会議

*印は細課題

部会名	各分類別成果数(令和6年度終了課題)								主要な成果
	普及	実証	参考	行政	保留	継続	その他	計	
作物部会						1		1	
野菜部会	1					3		4	1
果樹・オリーブ部会			1					1	
花き部会									
畜産部会									
経営部会									
土づくり									
計	1		1			4		6	

成果の分類基準

普及:ただちに普及に移し得る成果

実証:技術は完成しているが、現場実証等により適用性を検討する成果

参考:試験研究における技術成果で、直ちに現場での普及や実証には移せないが、技術者等への参考技術として提供できる成果

行政:技術は完成しており、行政が施策などに反映して遂行できる成果

保留:技術は完成しているが、経済性や技術的難度など受け皿側の問題、あるいは法律による制限などから普及場面の検討が必要で、ただちに普及に移せない成果

継続:技術の改良が必要な成果

主要な成果:以上の成果の中で、「普及」に分類された成果の中から、特に農業振興上、重点的に普及を図ろうとするもの

普及

表中課題名前の○印は主要成果、*印は細課題を示す

部会名	成 果 名
野菜部会	○ ブロッコリーの花蕾部病害対策技術の確立

参考

部会名	成 果 名
果樹・オリーブ部会	キウイフルーツ花粉除菌技術の実証と実用化

2. 印刷刊行物

印刷番号	印刷物名	所・課
1632 (24-01)	令和5年度 業務年報	企画・営農
1633 (24-02)	令和6年度 業務計画	企画・営農
1634 (24-03)	農業試験 125 年史	企画・営農
1635 (24-04)	豊穰 No. 62	研究発表運営委員会
1636 (24-05)	2024 年度水稲関係除草剤試験成績書	作物・特作

印刷番号	印刷物名	所・課
1632 (24-01)	令和5年度 業務年報	企画・営農
1633 (24-02)	令和6年度 業務計画	企画・営農
1634 (24-03)	農業試験 125 年史	企画・営農
1637 (24-06)	香川県農業試験場研究報告 76 号	編集委員会
1638 (24-07)	2024 年度水稻関係除草剤試験成績書(差し替え)	作物・特作
1639 (24-08)	令和5年度果樹試験成績書	府中
1640 (24-09)	鶏ふんペレットを利用した小麦の減化学肥料栽培	作物・特作
1641 (24-10)	令和6年度野菜・花き試験成績書	野菜・花き

3. 豊穰【No.62（令和6年12月）】

1) 野菜

アスパラガス改植法の検討	藤井 詩乃
施肥量がニンニク「太倉種」の球の形成に及ぼす影響	村上 裕一
「レイズドベッド」によるイチゴ無加温栽培体系	香西 修志
オクラ苗立枯病の発病に及ぼす温度の影響とユニフォーム粒剤の防除効果	北尾 美咲
施設ミニトマトにおける土着天敵タバコカスミカメを活用した	
コナジラミ類の防除技術	川田 千瑛
薬剤散布とイチゴうどんこ病分生子の関係	西村 文宏

2) 花き

光強度がランキンキュラス「小春てまり」の花弁の着色に及ぼす影響	植田 早紀
---------------------------------	-------

3) 果樹

アボカド脂質含量の簡易な推定手法の開発	秋山 晃輝
カンキツ果実を加害するハナアザミウマ防除は果実着色期直前の薬剤散布	小野壮一朗

4) 普通作

鶏ふんを利用した小麦「さぬきの夢 2009」の減化学肥料栽培	河原 望遥
【話題提供】新たに開発された水稻除草剤と使用法	吉田有梨花

5) 畦畔管理

急傾斜地における除草剤を利用した草刈作業軽減技術	藤田 究
--------------------------	------

6) 特作

オリーブの計画密植園における縮伐処理の効果	山本 実奈
特徴のあるオイル生産が可能な「香オリ5号」の収穫適期	川原 清剛
近赤外光照射によるオリーブ炭疽病の発病抑止効果の検討	藤村 俊夫

4. 香川県農業試験場研究報告【No.76（令和7年3月）】

1) ニンニク白絹病に対する有効薬剤の選定および処理時期の検討

片山貴博・西村文宏・佐野有季子

2) さぬきうどん用小麦新品種「さぬきの夢 2023」の育成

多田祐真・吉田有梨香・三木哲弘・小林美鈴・村上優浩・森芳史

3) 鶏ふんペレットを活用した小麦「さぬきの夢 2023」の減化学肥料栽培

河原望遥・三木哲弘・多田祐真・森芳史・中西充・中井清裕

4) 瀬戸内地域での茎枯病抵抗性アスパラガス「あすたま J」の生育・収量特性

村上裕一・中村智哉・池内隆夫

5) 香川県におけるキウイフルーツかいよう病 biovar3(Psa3)の発生推移と品種、防除との関係

生咲巖・遠藤温子・藤村俊夫・氏家章雄

6) キウイフルーツ新品種「さぬきエメラルド」の育成及び特性

川北兼奨・福田哲生・山下泰生・村尾昭二・水谷亮介・濱野康平

真鍋徹郎・小野壮一朗・大谷衛・末澤克彦

7) 有機物連用圃場における土壌中の炭素・窒素量の変化

阿部政人・松野宏治・山下陽子

5. 学会等発表・講演

発表者	発表課題	学会等名称	開催日
中山史菜 久保雅秀 藤原慎也 川北兼奨 村尾昭二	モモ‘なつっこ’における二重袋の除袋時期の違いが果実品質と果肉色に及ぼす影響	園芸学会中四国支部 令和6年度大会	2024/7/20
西村文宏 池田健一 片山貴博	タマネギベと病菌の一次伝染株発病予防効果の検証	令和6年度日本植物病理学会 関西支部会	2024/9/19-20
生咲 巖 Teeranaï Poti 秋光和也	キウイフルーツ炭疽病菌の各種果樹に対する病原性について	令和6年度日本植物病理学会 関西支部会	2024/9/19～20
松本匠哉 川田千瑛	施設イチゴ栽培における自動走行ロボットによる主要害虫への防除効果の検討	第28回農林害虫防除研究会	2024/10/4-5
Khanal S. R. S. Kozai Y. Murakami T. Ikeuchi	Examination the number of fruit set of strawberry in non-heating cultivation system by Raised bed	園芸学会令和6年度秋季大会	2024/11/3～5
藤井詩乃 中村智哉 山地優徳 吉越恆 池内隆夫	アスパラガス栽培における建設足場資材を利用した園芸用ハウスの導入（第3報）	園芸学会令和6年度秋季大会	2024/11/3～5
村上裕一	瀬戸内地方での茎枯病抵抗性アスパラガス‘あすたまJ’の生育・収量特性	園芸学会令和6年度秋季大会	2024/11/3～5
松本匠哉 川田千瑛	施設イチゴ栽培における自動走行ロボットによる主要害虫への防除効果の検討	第69回四国植物防疫研究協議会	2024/11/7-8
河原望遥 森芳史 多田祐真 中井清裕 三木哲弘 中西充	小麦「さぬきの夢 2009」における鶏ふんを活用した減化学肥料栽培法	日本作物学会四国談話会 第61回講演会	2024/11/28-29
片山貴博	地温に基づいたニンニク白絹病の防除適期の検討	令和6年度近畿中国四国農業試験研究推進会議病害虫推進部会 問題別研究会	2025/1/21-22
生咲 巖 青野光男 八木 遙 兵頭紋佳 坂井妙子 菊原賢次 須崎浩一	キウイフルーツかいよう病菌の除菌済みキウイフルーツ花粉が無害化されていることの確認	令和6年度果樹茶業研究会 果樹病害研究会	2025/1/28～29
長尾洋輝	香川県におけるイチゴ炭疽病の薬剤感受性検定について	令和6年度中国四国ブロック病害虫防除所職員等研修会	2025/2/27
香西修志	「NNハウス」におけるミニトマト簡易ロックウール栽培の検討	園芸学会令和7年度春季大会	2025/3/20～21
森田知子 浜田佳代子	ラナンキュラス栽培法の検討（第1報）	園芸学会令和7年度春季大会	2025/3/20～21

発表者	発表課題	学会等名称	開催日
浜田佳代子 棚瀬幸司 稲本勝彦	ラナンキュラスの塊根の養成および 保管条件が萌芽に及ぼす影響	園芸学会令和7年度春季大会	2025/3/20～21
中山史菜 伊賀悠人 川北兼奨 生咲 巖 福田哲生	除菌処理花粉を用いた人工授粉がキ ウイフルーツ‘さぬきゴールド’の結 実と果実品質に及ぼす影響	一般社団法人園芸学会 令和7年度春季大会	2025/3/20～21
福田哲生 川北兼奨 濱野康平 生咲 巖	キウイフルーツかいよう病 Psa 3 系 統の発生圃場における‘さぬきゴールド’及び‘香緑’への品種更新方法の 違いが樹体の発病様相、収量と果実品 質に及ぼす影響	園芸学会令和7年度春季大会	2025/3/20～21
松本匠哉 川田千瑛 菰淵啓三 中井清裕	展着剤の加用によるドローンによる 青ネギの害虫防除効果の検討	第 69 回日本応用動物昆虫学会 大会	2025/3/20-22
西村文宏 池田健一 片山貴博	SDHI 剤耐性ブロッコリー黒すす病 菌の変異部位	令和 7 年度日本植物病理学会 大会	2025/3/26-28
西村文宏	ブロッコリー黒すす病菌における SDHI 剤耐性菌の発生	第 34 回殺菌剤耐性菌研究会 シンポジウム	2025/3/29

6. 報告書、雑誌等

執筆者	課題名	掲載資料名	掲載箇所
香西修志 畔柳武司 河崎 靖 安場健一郎	外部細霧冷房が高温期のミニトマト栽培に おける温室内の環境および生育・収量に及 ぼす影響	園芸学研究 24 巻 1 号 (2025)	P53～62
香西修志	イチゴ育苗の省力化が可能な本圃増殖法と高度 環境制御の組合せによる高効率・省力生産 体系 ～作業時間短縮と収益向上により規模 拡大が可能に～	グリーンレポート 第 668 号(2025)	P8～9
生咲 巖	キウイフルーツに発生する病害の発生生態と 防除について	植物防疫 第 78 巻 8 号 (2024)	p57～63
川田千瑛	かがわ型アスパラガス栽培システムにおける無 人走行防除機を用いた害虫防除	植物防疫 Vol.79 23－30(2025.3)	
Teeranai Poti Gan Kisaki Arita Keishi Kazuaya Akimitsu	<i>Colletotrichum</i> species associated with loquat anthracnose in Kagawa and Tokushima prefectures, Japan	Japan Journal of General Plant Pathology 90 (5) (2024)	p241～ 253
秋山晃輝	香川県におけるビワの低樹高栽培	果実日本 第 79 巻 10 号 (2024)	P53～56
生咲 巖	ビワの害虫ビワキジラミについて	果実日本 第 79 巻 10 号 (2024)	p61～64
中山史菜	キウイフルーツの品種動向と今後の展望	果実日本 第 80 巻 3 号	P26～31
生咲 巖	ビワの害虫ビワキジラミについて	フルーツひろしま 第 44 巻 11 号 (2024)	p16～18

執筆者	課題名	掲載資料名	掲載箇所
秋山晃輝	アボカドの時期別脂質含量からみた本県における収穫期について	香川の果樹 236 号 (2024 年 7・8 月号)	P11～12
中山史菜	モモ「なつっこ」における二重袋の除袋時期の違いについて	香川の果樹 237 号 (2024 年 9・10 月号)	P15～17
生咲 巖	果樹カメムシ類の発生生態と防除について	香川の果樹 238 号 (2024 年 11・12 月号)	p9～11
伊賀 悠人	県育成キウイフルーツ品種における授粉濃度の再検討	香川の果樹 239 号 (2024 年 1・2 月号)	P11～13
福田 哲生	ブドウ「ピオーネ」における天然型アブシジン酸液剤処理による着色向上対策	香川の果樹 240 号 (2024 年 3・4 月号)	P13～16
谷川昭彦	讃岐うどん用小麦「さぬきの夢 2009」における肥効調節型肥料の全量基肥施用について	農業と科学 第 766 号 (2024 年 12 月)	P1～4

7. 職務発明

発明の名称	発明者	県職務発明審査会 認定日	備考
除菌剤の効果を増大するキレート剤を用いた花粉の除菌方法	須崎浩一 生咲 巖	令和 7 年 2 月 3 日	

V 指導・啓発活動

1. 農業大学校講師派遣

学年	科目	教科	時限×回	担当	氏名
1	基礎教育	作物学	2×1	作物・特作(作物)	相澤 美里 河原 望遥
		土壌肥料	2×4 2×4	病虫・環境(土壌肥料) 府中果樹研究所	阿部 政人 松本 匠哉 多田寿和子
		農業基礎実験	2×8	病虫・環境(土壌肥料)	阿部 政人 松本 匠哉
		農業簿記	2×4	企画・営農	山下 将吾
		雑草学	2×2 2×1 2×1	作物・特作(作物) 野菜・花き(野菜) 府中果樹研究所	吉田有梨花 村上 裕一 山下 泰生
		遺伝子資源活用概論	2×1 2×1 2×1 2×1	病虫・環境(生物工学) 野菜・花き(野菜) 作物・特作(作物) 府中果樹研究所	植田 早紀 藤井 詩乃 多田 祐真 山下 泰生
		植物防疫	2×4	病虫・環境(病虫)	西村 文宏 松本 匠哉 片山 貴博
	専門教育	(花き園芸コース) 宿根草Ⅰ(キク) 宿根草Ⅱ(カーネーション) 鉢花栽培	2×4 2×4 2×4	野菜・花き(花き) 野菜・花き(花き) 園芸総合センター	森田 知子 浜田佳代子 村上 一男
		(野菜園芸コース) 葉菜類栽培	2×8	野菜・花き(野菜)	伊藤 博紀 村上 裕一 藤井 詩乃 伊藤 彩 加成讃治哉
		(果樹園芸コース) カンキツ栽培 ブドウ栽培 キウイフルーツ栽培 オリーブ栽培	2×4 2×4 2×4 2×4	府中果樹研究所 小豆オリーブ研究所	久保 雅秀 福田 哲生 伊賀 悠人 川原 清剛 藤村 俊夫
	基礎教育	生物工学実験	2×8 2×8	病虫・環境(生物工学) 園芸総合センター	植田 早紀 村口 浩
		スマート農業	1×1 1×1	野菜・花き(野菜) 企画・営農	大矢 啓三 山下 将吾
		パソコン簿記演習	2×8	企画・営農	山下 将吾
2	専門教育	(野菜園芸コース・花き園芸コース) 養液栽培	2×4	野菜・花き(野菜)	伊藤 博紀
		(野菜園芸コース) 野菜新技術	2×2	野菜・花き(野菜)	香西 修志

2. 研修会等の講師など

研修会等名称	内 容	講師名	期 日
第 21 回香川県農業協同組合中央 地区キウイフルーツ部会総会	キウイ輸入花粉の価格高騰対策につ いて	福田哲生	2024/4/26
香川県農業協同組合仁尾町支店 果樹部会総会	果樹類の生育状況と高品質果実 生産	久保雅秀	2024/5/14
香川農業共済組合損害評価研修 会（モモ）	凍害がももの栽培管理に与える影響	中山史菜	2024/6/12
香川農業共済組合損害評価研修 会（ブドウ）	令和6年産ブドウの生育概況	福田哲生	2024/7/9
第 18 回香川県農業協同組合中央 地区ぶどう部会総会	「シャインマスカット」の2回目ジベレ リン処理時のフルメット単用処理につ いて	福田哲生	2024/7/12
小豆島オリーブ振興協議会 オリーブ夏期栽培講習会	夏期の栽培管理	川原清剛	2024/7/23 7/24、25
ながみね農業協同組合キウイフル ーツ部会総会	香川県におけるキウイフルーツの 病害虫対策について	生咲 巖	2024/8/5
香川県農業協同組合高松市西部 地域地域カンキツ高品質生産講 座	府中果樹研究所の試験研究の状 況について	山下泰生	2024/8/22
香川農業共済組合損害評価研修 会（キウイフルーツ）	キウイフルーツの栽培管理について	伊賀悠人	2024/9/6
小豆島オリーブ振興協議会 オリーブ栽培基礎研修	オリーブ栽培の基礎 病害虫防除と農薬の使用方法および 注意点	川原清剛	2024/9/6
香川県農業協同組合鬼無果樹研 究同志会定例会	カンキツにおける農業用ドロー ンによる病害虫防除の検討	生咲 巖	2024/10/2
香川大学農学部「オリーブ学」	オリーブの講義（歴史、活用）	柴田英明	2024/10/11 2024/11/15
	オリーブの活用（現地実習）	白井英清 川原清剛 山本実奈	2024/11/16
香川大学オリーブ栽培に関する講義	オリーブの栽培、歴史、生産振興等	白井英清	2024/11/9
農業基礎講座@農大オータムス クール	植物の虫と病気	三浦 靖	2024/11/22
香川県農業協同組合鬼無果樹研 究同志会研修会	果樹の試験研究の進捗状況	山下泰生	2025/1/30
全国農薬協同組合中国・四国地区 会議	カンキツドローン防除の効果と 課題	生咲 巖	2025/2/4
小豆島オリーブ振興協議会 オリーブ冬期栽培管理講習会	整枝せん定、今後の栽培管理	川原清剛	2025/2/16 —2/19
JA 東うわ研修会	イチゴ病害の生態と防除方法につ いて	西村文宏	2025/2/19
小豆島オリーブ振興協議会 栽培高度化研修	「香オリ3号」及び「香オリ5号」の栽培 及び加工特性	川原清剛	2025/2/28

3. 品評会、審査会等の出席

品評会、審査会等名称	主 催 者	氏名等	期 日
損害評価会キウイフルーツ共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2024/7/23
損害評価会かんきつ共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2024/7/23
損害評価会麦共済部会	香川県農業共済組合	森 芳史	2024/8/2,11,14
損害評価会水稻共済部会	香川県農業共済組合	森 芳史	2024/12/18,3/11
損害評価会なし共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2024/12/19
損害評価会くり共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2024/12/19
損害評価会かき共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2025/1/30
損害評価会ぶどう共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2025/1/30
損害評価会かんきつ共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2025/3/14
「さぬきの夢」うどん技能グランプリ	農政水産部(農業生産流通課)	岡田彰夫 多田祐真 吉田有梨花 河原望遥	2024/9/4,9/6,9/13、
香川県主要農作物種子協会幹事会	香川県主要農作物種子協会	森 芳史	2024/6/19
令和7年産種子麦採種計画等検討会	香川県主要農作物種子協会	森 芳史	2024/9/19
かがわオリーブオイル品質評価・適合表示制度等適正化審査会	農政水産部(農業生産流通課)	白井英清	2024/10/3
第 68 回高松市菊花展競技会	高松市、香川県菊友会	岡崎 力 大熊将夫	2024/11/5
損害評価会モモ共済部会	香川県農業共済組合	十河土志夫	2024/11/19
第 61 回香川県花き品評会(立毛の部)	香川県、花の里かがわ推進委員会 高松市農業振興協議会	森田知子 浜田佳代子 村上一男 村口浩	2024/10/17、11/28、12/6、7
農業大学校卒業論文発表会	香川県立農業大学校	十河土志夫	2024/12/20
令和7年産水稻種子もみ採種計画検討会	香川県主要農作物種子協会	森 芳史	2025/1/28
第 61 回香川県花き品評会(生産物の部)	香川県、花の里かがわ推進委員会 高松市農業振興協議会	浜田佳代子 村上一男	2025/2/21
高松市園芸品評会(不知火)	高松市	山下泰生 久保雅秀	2025/2/22

4. 技術研修生受け入れ

1) 特別研修生

研修項目(受け入れ先)	人数	国籍・所属	期間
作物、野菜及び花きの高品質・安定生産技術の習得 (本場)	2名	香川大学農学部 インターンシップ	2024/9/2～9/6
果樹の栽培技術の習得 (府中果樹研究所)	1名	香川県農業協同組合 (JA 香川県農業インターン生) (JA 香川県新規採用職員)	2024/5/1～2025/3/31
主要野菜、花き及び果樹の生理・生態と栽培技術の習得 (野菜・花き研究課、府中果樹研究所)	3名		2024/6/17～2025/3/31

2) 農業大学校専攻生

人数	専攻コース	研修担当	期間
1 名	野菜園芸	野菜・花き研究課(野菜担当) 病虫・環境研究課(病害虫担当)	2024/4～2025/2

3) 職場体験学習受け入れ

学 校 名	人数	期 間	受け入れ場所
綾川中学校	2 名	2024/11/26～11/28	本場

5. 技術指導・見学来訪者など

① 本場(満濃試験地含む)

訪問日	訪問者(個人名、団体名)	人数	目 的
4 月 8 日	揖斐川工業(株)	2	水稻育苗培土試験打合せ
4 月 9 日	東交バス(株)	1	小麦委託プロ現地検討会バス打合せ
4 月 10 日	日本植物調節剤研究協会 近中四支部	1	水稻除草剤試験打合せ
4 月 17 日	国・県農試、大学、農水省担当者	17	小麦委託プロ現地検討会
4 月 26 日	(一社)家の光協会、JA 香川県	2	小麦新品種「さぬきの夢 2023」について取材
5 月 9 日	片倉コープアグリ(株)	2	水稻肥料試験打合せ
5 月 2 日	綾上小学校	30	稲の栽培について(お米学習)
6 月 26 日	片倉コープアグリ(株)、中四国クボタ(株)	10	水稻施肥試験田植
7 月 1 日	農研機構、香川高等専門学校、株式会社、農業法人	7	戦略的スマート農業技術等の開発・改良「施設園芸における高収益栽培体系を実現するための技術開発」令和6年度計画検討会
7 月 25 日	栗熊小学校		サマースクール
7 月 29 日	片倉コープアグリ(株)	2	水稻肥料試験打合せ
8 月 8 日	農林水産省本省、中国四国農政局他	6	食料・農業・農村基本法キャラバン
8 月 22 日	朝日肥糧(株)	1	麦肥料試験打合せ
9 月 4 日	福島県議会農林水産委員会	11	NN ハウス及びアスパラガス栽培について
9 月 11 日	桜町中学校		土壌分析、病害虫の調査体験
9 月 26 日	中国四国農政局香川県拠点	2	水稻作況

訪問日	訪問者（個人名、団体名）	人数	目 的
10 月 8 日	ジェイカムアグリ(株)	3	肥料試験打合せ
10 月 9 日	朝日肥糧(株)、ジェイカムアグリ(株)	6	麦肥料試験打合せ
10 月 29 日	中国四国農政局香川県拠点	2	水稲作況
10 月 8 日	ジェイカムアグリ(株)	3	肥料試験打合せ
11 月 12 日	JAIC ベトナム(ファーマーズ協同組合)	8	野菜及び病害虫防除について
11 月 21 日	片倉コープアグリ(株)	2	水稲肥料試験打合せ
12 月 5 日	パラオ駐日大使	4	イチゴの育種について
1 月 6 日	NHK 高松放送局	1	小麦品種開発取材
1 月 15 日	(株)ハイレゾ、AGRIST(株)他	11	スマート農豪に関する情報交換
1 月 16 日	NHK 高松放送局	3	小麦新品種「さぬきの夢 2023」について取材
1 月 16 日	朝日肥糧(株)、ジェイカムアグリ(株)	4	水稲肥料試験打合せ
1 月 16 日	NHK 高松放送局	1	さぬきの夢 2023 の取材
1 月 22 日	ジェイカムアグリ(株)	2	水稲肥料試験打合せ
1 月 23 日	開成工業(株)	3	太陽光発電装置の利用について打合せ
1 月 24 日	日本農業新聞	1	イチゴうどん粉病に関する取材
1 月 30 日	京都府城陽市農業委員会		新品種育成について
1 月 30 日	日本農業新聞	1	豊穰「イチゴうどんこ病」記事に係る取材
2 月 3 日	愛媛県八幡浜支局	1	水稲関係視察
2 月 14 日	片倉コープアグリ(株)	2	水稲肥料試験打合せ
2 月 19 日	北海道農業研究センター	1	小麦試験視察、打合せ
2 月 25 日	株式会社ハウフルス	6	小麦新品種「さぬきの夢 2023」について取材
2 月 28 日	農研機構、香川高等専門学校、株式会社、農業法人	9	戦略的スマート農業技術等の開発・改良「施設園芸における高収益栽培体系を実現するための技術開発」令和6年度実績検討会

注) 県内生産者等に対する個別相談業務は除く。

② 府中果樹研究所

訪問日	訪問者（個人名、団体名）	人数	目 的
5 月 24 日	NHK 高松放送局	3	果樹カメムシに関する取材
5 月 29 日	朝日新聞	2	果樹カメムシに関する取材
6 月 6 日	四国新聞	1	果樹カメムシに関する取材
6 月 12 日	香川県農業共済組合		モモ栽培現地研修会

訪問日	訪問者（個人名、団体名）	人数	目 的
6 月 25 日	ながみね農業協同組合	25	キウイフルーツ栽培に関する視察研修
7 月 9 日	香川県農業共済組合		ブドウ栽培現地研修会
7 月 9 日	JA 香川県西部果樹青壮年部		カンキツ栽培に関する視察研修
7 月 10 日	国際応用情報学研究機構		施設見学
7 月 24 日	(株)ReFruits	5	キウイフルーツ栽培に関する視察研修
9 月 4 日	三瓶町農業経営者研究協議会	14	ウンシュウミカン栽培に関する視察研修
9 月 9 日	えひめ中央農業協同組合	14	柑橘・落葉果樹栽培に関する視察研修
9 月 17 日	香西かんきつ部会	10	ウンシュウミカン栽培に関する視察研修
9 月 19 日	香川県農業共済組合		ウンシュウミカン栽培現地研修会
9 月 25 日	岡山西青壮年部玉島北支部	10	モモ・ブドウ栽培に関する視察研修
9 月 26 日	JA 香川県宝山地域みかん部会	12	カンキツ栽培に関する視察研修
10 月 2 日	ひろしま農業協同組合はるか部会	8	カンキツ栽培に関する視察研修
10 月 3 日	小豆島柑橘部会	19	カンキツ栽培に関する視察研修
10 月 11 日	全国果樹研究連合会会長会	40	施設見学
10 月 21 日	JA 香川県善通寺地区枇杷部会	11	ビワ栽培に関する視察研修
10 月 25 日	広島県果樹研究同志会瀬戸田支部	20	カンキツ栽培に関する視察研修
11 月 20 日	JA 岡山市一宮選果場果樹部会 青年部	5	キウイフルーツ栽培に関する視察研修
1 月 29 日	佐那河内農業振興協議会	20	柑橘・落葉果樹栽培に関する視察研修
2 月 6 日	大分県農林水産研究指導センター 農業研究部果樹グループ	2	キウイフルーツ・ブドウ栽培に関する視察 研修
2 月 7 日	愛媛県南予地方局農林水産振興部	2	柑橘・落葉果樹栽培に関する視察研修
2 月 28 日	弘前中央青果(株)	4	キウイフルーツ栽培に関する視察研修

注) 県内生産者等に対する個別相談業務は除く。

③ 小豆オリーブ研究所

訪問日	訪問者（個人名、団体名）	人数	目 的
4 月 18 日	韓国・生産者	26	視察
6 月 3 日	ルーカス・シンクレアほか	3	施設見学、研究内容について取材
7 月 11 日	府中オリーブ園	3	オリーブ栽培管理について
9 月 20 日	生産者	1	オリーブの管理について
11 月 25 日	NHK 高松放送局	1	オリーブ新品種についての取材

注) 県内生産者等に対する個別相談業務は除く。

④ 園芸総合センター

訪問日	訪問者（個人名、団体名）	人数	目 的
6月6日	県立香川中部支援学校高等部（1年生、職員）	29	現場見学について
6月7日	栗林公園ボランティアガイド	10	園内ツアー
7月8日	島根県やすぎ花き部会	10	植栽状況について
8月2日	高松市立香東中学校（2年生）	4	花きの現地実習について
9月18日	香川県立香川中部支援学校高等部（1年生、職員）	12	花きの現地実習について
11月6日	令和6年度新任者研修P-1	4	本県花きの生産の現状と園芸優良種苗対策について
12月10日	県立香川中部支援学校中学部（3年生、職員）	18	職場見学について
1月17日	日本農業新聞	1	除草剤を用いた急傾斜地管理の取材
2月8日	お花見散歩ガイドツアー	9	植栽状況について
2月16日	お花見散歩ガイドツアー	20	植栽状況について
3月21日	リニューアルオープンガイドツアー	25	植栽状況について
3月25日	日本農業新聞/高松リビング新聞社	1	リニューアルに関する取材

注) 県内生産者等に対する個別相談業務は除く。

Ⅵ その他

1. 委員会・協議会等の委員など

委員会等の名称	役職等	職 名	氏名
農業に関する普及・研究・行政連絡会議	委員	場長	岡崎 力
農業に関する普及・研究・行政連絡会議 (企画戦略会議兼スマート農業戦略総合部会)	議長	副場長	藤本 伸
香川県試験研究機関場所長連絡会	委員	場長	岡崎 力
香川県試験研究機関場所長連絡会幹事会	幹事	副場長	藤本 伸
近畿中国四国農業試験研究推進会議	本会議構成員	場長	岡崎 力
綾上園芸優良種苗生産連絡会	会長	園芸総合センター所長	大熊将夫
香川県植物防疫協会 香川県施肥合理化協会	幹事	作物・特作研究課長 病虫・環境研究課長 病虫害防除所主席研究員	森 芳史 川西健児 鐘江保忠
	理事	場長	岡崎 力
香川県主要農作物種子協会	幹事	作物・特作研究課長	森 芳史
	参与	場長	岡崎 力
香川園芸研究協議会	副会長	場長	岡崎 力
	理事	府中果樹研究所長 小豆オリーブ研究所長 園芸総合センター所長 病虫害防除所長	十河土志夫 白井英清 大熊将夫 森 充隆
	監事	副場長	藤本 伸
四国地区気象情報連絡会	委員	場長	岡崎 力
高松市農業基本対策審議会	専門委員	場長	岡崎 力
農業インターン制度運営委員会	委員	場長	岡崎 力
香川県農業共済組合連合会損害評価会	委員	場長 府中果樹研究所長 作物・特作研究課長 満濃試験地主任研究員	岡崎 力 十河土志夫 森 芳史 佐藤秀輝
高松市菊花展競技会	審査員	場長 園芸総合センター所長	岡崎 力 大熊将夫
香川県花き品評会	審査員長	場長	岡崎 力
香川県花き品評会	審査員	野菜・花き研究課主席研究員 野菜・花き研究課主任研究員 園芸総合センター主席研究員 園芸総合センター主席研究員	森田知子 浜田佳代子 村上一男 村口 浩
「さぬきの夢」うどん技能グランプリ審査会	審査員	作物・特作研究課長 作物・特作研究課主席研究員 作物・特作研究課主任研究員 作物・特作研究課主任技師 作物・特作研究課主任技師 作物・特作研究課技師	森 芳史 岡田彰夫 多田祐真 谷川昭彦 吉田有梨花 河原望遥
かがわオリーブオイル品質評価・適合表示制度 等適正化審査会	委員	小豆オリーブ研究所長	白井英清

委員会等の名称	役職等	職 名	氏名
かがわオリーブオイル品質評価・適合表示制度 認定製造事業者の製造工場等への立入調査	調査員	小豆オリーブ研究所技師	多田寿和子
香川県オリーブオイル官能評価パネル	パネルリーダー	小豆オリーブ研究所主席研究員	柴田英明
ISO/IEC 17025:2017 認定試験所	ラボラトリマネ ジメント	小豆オリーブ研究所長	白井英清
園芸学会中四国支部会	評議員	府中果樹研究所長	十河土志夫
日本作物学会四国談話会	学会賞選考委員	作物・特作研究課	森 芳史
	評議員	作物・特作研究課	三木哲弘
土壌保全調査事業全国協議会	副会長	病虫・環境研究課主席研究員	阿部政人

2. 職員研修

国内派遣研修(依頼研究員)

研修参加者	研修テーマ	実施機関	期間
片山 貴博	ニンニクに感染しているウイルス種の 同定および各ウイルスの単離技術の 習得、リアルタイム PCR による検出系 の確立および弱毒ウイルスの探索・作 出	国立研究開発法人農業・食品産 業技術総合研究機構 植物防疫研究部門	2024/6/1 ～2024/8/30
村上 裕一	アスパラガスの薬培養由来純系ホモ 個体利用による有望系統の作出手法 の習得	九州大学大学院農学研究院	2024/11/11 ～2024/12/26